

第5回 「清流長良川流域の生き物・生活・産業」連続講座

長良川の魅力を語りつくす！

講演録

日 時：平成30年2月18日（日）

場 所：ウィルあいち 3階 大会議室

（原田委員）

皆さん、こんにちは。本日はどうぞよろしくお願ひいたします。今回第5回目となります「清流長良川流域の生き物・生活・産業」連続講座を行いたいと思います。残念ながら、実は最終回ということで、5回目を迎えた訳ですが、1回目から4回目を連続でお越しいただいている参加者の皆さんもおありかと思ひます。ありがとうございます。

今日はですね、長良川の魅力を語りつくすということで、わいわい談義にもこの4回の間にお越しいただいたゲストの方々ですとか、委員の中から登壇された方などにお話ししていただくこととなっております。16時30分までの時間、どうぞ皆さんじっくりと、じっくりとお話を聞いていただけたらと思ひております。

講演には、いつものとおり、皆様からの質問コーナーもございますので、どんどん質問をお願いいたします。そしてアンケート調査も入っております。アンケートの方も是非お答えいただきまして、次の運営の向上に活かさせていただきたいと思ひますので、ご協力をお願いいたします。

さて、第5回目となりました今回は森から川へつながる、森、山、川、海、その大自然を、楽しんで、そして愛して、守っているアウトドアウェアのパタゴニアさんにお話を伺いたいということで、とてもカッコいい、パタゴニア日本支社長の辻井隆行さんにお越しいただいておりますので、準備の方、お願ひいたします。辻井支社長、お願ひいたします。

今日は、辻井日本支社長さんには東京からお越しいただきましたが、名古屋にはパタゴニア名古屋ストアがありまして、皆さんのお手元にチラシが入っているかなと思ひますけれども、名古屋ストアは3月28日にリニューアルオープンを控えています。パタゴニアの哲学とか理念をしっかり伝えてくださっている名古屋ストアスタッフさんが今日は来ていらっしやってます。3月28日、パタゴニア名古屋、リニューアルオープンということを入念に入れていただけるといいかなと思ひます。では、ご準備の方は。では、辻井支社長、よろしくお願ひいたします。

（辻井支社長）

皆様、改めまして、こんにちは。ありがとうございます。今日は、本当にこういう貴重な場に声をかけていただいて、愛知県の皆様、関係者の皆様、本当にありがとうございます。それから、折角のこんな天気のいい、しかもオリンピックの最中で、大事な試合もい

っぱいある時間にですね、お越しいただいた、皆様にもお礼申し上げたいと思います。

僕の方から、パタゴニアという、これはもともとアメリカのようなんですが、長良川そのもののお話というよりは、もう少しなんか、こう、今、なんとなくビジネスとか経済の方が、自然環境とか、人間とのつながりとかということよりも、上位にあるというか、大事だというような感じの流れがあると思うんですけど、少しそのあたりも含めて、ビジネスがどんなことにこう依存して、毎日、仕事ができているのかとか、人間と自然のつながりというのを、どうやって僕たちがビジネスとしてこう見ているのか、というようなことを少しお話して、その後の、長良川の第2部の方につながっていければなと思っております。

ちなみに、パタゴニアという会社、なんとなく聞いたことがあるけど、よくわからないという方、正直ベースでどれくらいいますか。もうちょっと、ぶっちゃけで、手を挙げていただけたら。ありがとうございます。一応、全くご存知ない方にも、前半はパタゴニアっていうビジネスをご紹介しつつ、僕たちの考え方をお話して、後半のところでもう少し、僕たちが関わっている自然保護の活動、主に森、川、里、海とのつながりについてお話ししたいと思います。

パタゴニアというのはアウトドアスポーツ、オリンピックにはあんまりでてこないんですけど、例えば、自然の中でなるべく人力でですね、動力を使わないで、楽しむようなスポーツ。これはよく、今度、東京オリンピックから公式種目になると言われている、ロッククライミングですね。オリンピックでは室内でやるんですけど、それは本当の自然の岩の中で登ってみたりですね、それからそれを冬にやってアルパインクライミングみたいなものとか、それからスノーボードもオリンピックでは人が作ったコースを滑るんですけど、僕たちはなるべく自然の中に、こう自分たちで人力で登って行って滑るような、そういったスポーツを楽しむ方々が快適に、なるべく安全にスポーツに集中できる、そういった機能を持っている洋服作りというのが僕たちの本業です。一言でいうと洋服屋。洋服屋はいっぱいあるんですけども、アウトドアウェアって、パタゴニア以外にも、いろいろこう、皆さんご存知の、名前を出すとノースフェイスとか、コロンビアとか、モンベルとか、沢山あるんですけど、僕たちのその違いは何かということをも2つだけ今日ちょっと簡単にご紹介したいと思います。

こだわりを二つだけご紹介したいんですが、一つ目は、僕たちカルフォルニアって、アメリカの西海岸に本社があるんですけど、1973年に創業したんですが、1988年にニューヨークのちょっと北にある東海岸のボストンというところにお店を出したんですよ。これ洋服屋さんです。このたぶん会場の4分の1くらいの小さなお店を出したんですよ。そしたら、お店を開店して3か月くらいで、働いているスタッフが体調不良を起こして。もっと具体的にいうと、頭痛だったりとか、この辺の疾患を訴えたんです。で、おかしいなと思って、お店の内装工事をやってくださった建築屋さんを呼んで、いろいろ調べてもらったら、換気扇が壊れていたんですね。でも、換気扇が壊れていても、よく考えたら、病気

にならないんじゃないですか。よくよく原因を調べてみたら、地下室に保管していたTシャツですね、Tシャツのストックからホルムアルデヒドというのが空気中に放出され続けていた。で、Tシャツ着ているのは、皆さんご存知の、綿花とか、和綿とか、コットンというのからできているんですが、コットンというのは天然素材だから、僕たちは環境にも、人にも、一番優しいと思って使っていたんですね、当時。

ところが、どうやらいろんなことが起きているらしいということで、1992年ですね、それから2年くらいして、これはちょうどカリフォルニアにあるコットン畑に見学にみんなで行って見たんです。そしたらものすごく、いろんな衝撃的なことがわかったんですね。コットン畑に行ったことがあるという方いらっしゃいますか。いません。いないですよ。今日は皆さん全員コットンの洋服を着ていらっしゃるんですけど、今は100%輸入品ですね。メイドインジャパンと書いてあるコットン製品を見ますが、最後に日本で売られていますという意味で。もともとの綿花というのはインドとか、パキスタンとか、アフリカとか、中国とか、アメリカから輸入されています。和綿を作っている方はいらっしゃるんですけど、流通にはほとんど乗っていません。で、今でもほとんどのコットンは、こうやって使われているんですが、コットンは地球上のいろんな作物の、特に穀物の耕地面積の、当時で言うと1.5%くらいしか使っていないんです。トウモロコシとか、大豆とか、いっぱい作っているじゃないですか。1.5%の面積にしか使っていないのにも関わらず、当時世界中で使われていた殺虫剤の5分の1がコットンだけに使われていたんです。20%。農薬も10%以上使われていました。

僕たちが一番びっくりしたのは、コットンというのは食べられない野菜という人もいらっしゃるくらいで、種を蒔いて、雑草をとって、害虫をとって、最後できたものを食べる代わりに、糸に紡いで、生地にして、Tシャツになるわけなんですけど、ものすごい最後のいい糸を作るのに、不純物がそのコットンの綿花に入るとダメなんですよ。一番の敵は自分自身の葉っぱがカサカサに枯れたやつが入りこむと、いい糸ができないので、何をやってたかという、枯れ葉剤を散布したんですよ。で、これは昔、授業でやったかもしれないんですけど、ベトナム戦争で使われた神経兵器と、ほとんどこれ成分が変わっていないですよ、今も。有機リン酸エステル系の劇薬ですから。使った人は健康被害になるわけなんですよ。なんで、これ農家さんですよ。農家さんが、僕たち見学にいったら、毒ガスマスクをして仕事をしていたんですよ。で、僕たちはびっくりして、どうしようかと。

創業者は今、今年で80歳になるイヴォンという人が創業者なんですけど、イヴォンはこれ知っちゃったのに、こんな材料使い続けて本当にビジネスやっていいのかということで、2年かけて農薬や殺虫剤や枯葉剤を使わない有機農業で育てられた綿花だけを使ってTシャツやジーンズやシャツを作ろうということになりました。今から23年前のことらしいですね。なんで僕たちは今日着ているズボンなんか、オーガニックコットンです。オーガニックコットンはよく、着ている人の体にいいと勘違いされるんですけど、これは作っている農家さんが死なずにすむ、今、年間実際に3万人の命が地球上で、毎年毎年コ

ottonの農家さんが命を落とされていますんで、そういうリスクがないとか、もしくは土壌に悪い影響が与えられないというのがオーガニックコットンの利点です。これはコットンボールです。これはオーガニックコットンの畑です。だいぶ違いますよね。

こだわりの二つ目。一つ目は、コットン以外にも僕たちは、ポリエステルとかね、フリースとか、ダウンとか、いろいろな素材を使うんですけど、地球にやさしい素材とか、環境にやさしい素材というのはありえないですよ。当たり前なんですけど、ゼロから1は生れないので、地球上の資源を何らかの形で採って、水やエネルギーを大量に使って、CO₂を出して、形を変えたものを販売するというのがビジネスですから、全部悪いんです。でも、全部悪いものの、悪いインパクトはなるべく少しでも小さくしようというのが、一つ目の僕たちのこだわりです。二つ目なんですけど、これも少し難しくて、今日皆さん洋服着ていらっしゃるんですけど、どこの誰がどんな気持ちでね、皆さんの洋服を作ったかというのがわかっているかな。あんまりいないですよ。難しいですよ、今の社会では。200年くらい前は、もしかしたらわかっていたかもしれないですね。着物だったら共有税とか、食べ物だったら、どこのおばあちゃんが育てた小豆で作った饅頭とか。ところが、この近代合理主義というか、今の資本主義の社会ではまずわかりませんよね。どんなことが起きているか。

この写真、あの見たことある方、いますか。ちょっと遠くて見えないですかね。これはバングラデシュという国が東南アジアにあるわけなんですけど、今すごく沢山の洋服が作られています。沢山の縫製工場があるんですね。これダッカという首都の、ある郊外の縫製工場ですね。ラナプラザという縫製工場です。2014年だったと思いますけど、4月24日に起きた事故の写真です。これ8階建ての工場に、4,000台のミシンが設置してあって、4,000人の縫製労働者の方が洋服を作っていたんですね。ところが5階から上は違法建築で、どんどんどんどん安い服を作ってくれというので、外国の企業から発注があって、許可を取らずに付け足していったんです。そしたら建物にひびが沢山入って、この4月の23日に働いていた多くの方々ですね、大体は19歳から21歳の女性だったんですけども、彼女たちは気味が悪いからもう働きたくないと言ったそうです。

これは日本のメディアで全く放送していないんで、僕はBBCとか、アメリカのニューヨークタイムズとか、そういうものを見て、知ったことを今話しているんですけど、工場の社長たちは、そんなに来たくないんだったら、働かなくてもいい。その代わり4月分の給料は払わないと言ったそうです。もう4月の23日ですから、その分の給料を貰わないと、19歳から21歳の女性でもお子さんが沢山いたり、家族がいたり、食べていかなきゃいけないというので、3,000人のワーカーの方がいやいや翌日ですね、働いて、8時24分に大型のジェネレーターを回して3,000台のミシンを動かしたとたんに、ビルが倒壊したんですね。で、1,200人近くの方が生き埋めになって亡くなりました。

ここで製品を作っていたのは、世界で売り上げトップテンに入るファーストファッションですね。イギリスでは売り上げナンバーワンです。上場企業です。そこで売られている

Tシャツは、大体400円から500円なんですけど、ここで働いていた縫製労働者の方々の時給というのは大体10円です。10セントから20セントと言われてます。で、僕はこれを見たときに、どうしてこういうことが起きるんだろうかと考えると、自分自身にもやっぱり責任があると思ったんですね。それは東京とか、名古屋とか、パリとか、ロンドンの人たちが、Tシャツは3,000円より2,000円の方がいい、2,000円より1,000円の方がいい、1,000円より500円の方がいいと思いつけると、どっかにしわ寄せがいくわけです。だいたいそれは辺境の地にいて、力がない、発言権がない、そういう方々のところに全部しわ寄せがいくんですね。だからそういう需要がある限り、ものを安く作んなきゃいけないという、その企業に対する圧力というのは、なくならないと思いました。

だから買い物というのは、なんとなく自分で稼いだお金だから何買ってもいいだろう、僕の権利だと思ってたんですけど、実際には権利ではなくて、きちんとした買い物によって、だれも傷つかないということちゃんと自分が確認して、そのお金を使うという義務が自分にあるんじゃないかなというふうに思った事故でした。

パタゴニアも同様に自社工場を持っていないので、世界中のいろんな工場にお願いして、洋服を縫ってもらっています。で、こういうことが起きない第一歩は、やっぱり透明性だなというふうに考えているので、全部のサプライチェーンをウェブサイトで公開しています。全部が100点満点取れてないですね、残念ながら。でも、100点満点取れてなくても、例えば、ある工場長さんが、今はこういう状態だけれども、来年はこうしたい、再来年はこうしたいという、改善をしていくという意思があれば、僕たちはお付き合いをして、きちんと発注をして、お金を支払って、状況を変えていく。で、その方法の一つがフェアトレードという仕組みですよ。

名古屋市は日本で3番目のフェアトレードタウンなんで、皆さんご存知かなと思いますけど、フェアトレードと洋服づくりにまつわる2分くらいの動画がありますので、よかったらちょっとご覧になってください。

(動画再生)

フェアトレードというのは、簡単に言うと、さっき言ったとおり、よくフェアトレードの話をする、そもそも所属、国の所属が違うんだから、日本のね、基準で時給10円じゃかわいそう、おかしいだろうという人がいらっしゃるんですけど、実際にはそんなことなくて、その国の基準の中で最低限食べていけるお給料をもらっているかどうかという基準です。よくあるんですけど、発展途上国というのは先進国の工場を誘致したいので、労働基準法的なこととか、それから環境法というのをすごく緩くするんですね。工場の排水の基準が緩ければ、緩いほど、先進国は投資が少なくてすむんで、沢山やってくるじゃないですか。同じように最低賃金が低ければ低いほど、いろんなメーカーが工場を建ててくるんですよ。だからよくあるのは、国が定める最低賃金というのと、実際に最低限

これくらいないと生きていけないよねという、生活賃金の差というのが発生しています。それをメーカーが補填するというのが、僕たちが取り組んでいるフェアトレードです。なので、彼らが貰っている給料に上乗せして、プレミアムという追加の上乗せ賃金をお支払いするんですけど、僕たちの場合は、半分はお客さんがそれを負担してくださって、半分は僕たちが負担をしています。

実際には、そのプレミアムという上乗せの賃金が、フェアトレード、僕これいいなと思うところは、パタゴニアが例えばその工場長に直接渡しちゃうと、工場長が悪い人だと、例えばボーナスにしちゃったりとかね自分の、何か違うことに使ったり。でもこのプレミアムは働いている方々の、労働者の口座に直接振り込むんですよ。そうすると彼女たちとか彼らはそのお金を使って、例えば、学校を建てようとか、病院をちょっときれいにしようとか、労働環境を良くしようとかってことを自分たちで話し合っただけで決める、人間の尊厳ということが与えられるというのがすごく良いところだというふうに思っています。ということで、できれば僕たちは、アウトドアマンの人たちが寒い思いをせずに、命を危険にさらさずに使ってもらえる洋服というものを作っていきたい。それで、同じ品質が担保できるんだったら、環境や人権に与える不要な、不必要な悪影響を最小限に抑えたいというのが、今までお話ししたところなんです。まだまだ60点か70点くらいしかとれていないんですけど、そこはずっとこう、改善していきたい。

もう一つ、じゃあそういうビジネスを使って何をしたいかというのと、やっぱりオーガニックコットンの時でもそうなんですけど、コットンが人を殺しているということを本当に知らない方が多いですよ。これ去年のデータですから、3万人亡くなって、300万人の方が病気になっている。そういったことをビジネスを使って皆さんに知っていただいて、そして解決に向かって共に歩いていくというのが理想の状態です。それを考えるうえで僕たちがベースにしているのは、やっぱりあの当たり前なんですけど、何か、環境問題というのと、僕も飲んでる時とかに環境問題の話とかをしちゃうんですよ、最近。そうすると大体みんな嫌な顔を、嫌じゃないですか環境の話って、マイ箸なんかを出そうものなら、出たなパタゴニアみたいな感じになるんですけど、何でだろうなって。そう考えると僕も10年、15年前まではそんなことはやっぱり考えていなかったんですよ。でも、最近その、こういう会社に入ってこういうポジションについていろんな人にお会いして、もうそろそろそういうアレルギーとか言っている段階じゃないなという感じがすごくしているんですよ。これはもう、環境問題って、環境の話ではなくて、人間がこれまでと同じように自然を使ってやっていけるかという話で。人間が全員いなくなっても別に地球はずっとあるので、環境はあるじゃないですか。そうするとこれは運命共同体だなというふうに感じます。

環境問題をいろいろ口で説明するよりも、一昨年くらいにできた映画で、これ映像で見ると今僕たちってこういう状況にあるんだな、というのがすごくわかりやすいと思った映画があってですね。そのエンディングのシーンを、お話しする時に使わせてもらえないか

って配給会社をお願いしたら、特別にいいですよということだったので、今日はちょっとそのラストの4分間くらいをご一緒に見ていただきたいと思います。

(動画再生)

今見ていただいたのは、ナショナルジオグラフィックというメディアが、アカデミー賞のレヴェナントで主演男優賞をとったレオナルド・ディカプリオという人を主演にして作った映画です。これ一応、月間770円払うと映画見放題というチャンネルに入っていたら、全編90分あるんですけど、本当にわかりやすくいい映画なので、もし機会があればご覧になってみてください。「地球が壊れる前に」という映画です。

僕たちは、死んだ地球ではもうビジネスは成り立たないということを前提にビジネスを考えると、そんなに考え方としては複雑じゃなくて、例えば一日今150種くらい種がいなくなっているというふうにある学者さんは言っていて。これは本当か嘘かは僕もわからないんですけど、計算すると、地球上にいる今わかっている全部の種割る150にすると、大体350年から400年らしいんですよ。そうすると400年後にはもう全部の生き物がなくなって、人間がそのどこなのかっていう話で。これは、いやそんなことは嘘だよという選択肢と、それはまずいから何かしようという選択肢しかなくて。僕は何かのリスクよりは、何か動いて、もしかしたら間違いを犯して、でも間違っていたらそれを直すってことのリスクの方が少ないなというふうに思うので、何か行動を起こそうということなんです。

僕たちが生きていくうえでは、気候変動のスピードが落ちないと、もう異常な数の今日本でも南岸低気圧というものが通って、東京で雪がどんどん降ったりしてますけど。ああいうことが止まらなかったり、生物多様性が回復しないといけない。

アパレル企業として活用できるエリアは4つあるのかなと、一つは本業ですね、洋服づくり、洋服の産業です。その洋服づくりが、これはちょっと眠くなるような資料ですけど、何が言いたいかというと、1990年頃というのは、日本に下着以外の洋服というのは、1億人の人口に対して12億着くらい流通していたらしいんですよ。そのうちの96%くらいはお店が買ったり消費者の人が買われていたんですよ。それが段々段々いろんなビジネスの形態が変わってきて、今は1年間で30億着近い洋服が作られたり輸入されたりしているんですね。当時、1990年代は日本の国産の割合は5割だったんですけど、今は3%ですね。97%は輸入品なんですけど。30億着日本で作られたり輸入されたりしているうちの売れているのは13億6千万着なんです。

どういうことかと言うと、15億着はメーカーが売る前に不良在庫になっているんですよ。で、これ何しているか、わからないですよ公開していないから。僕の予想は燃やしていると思います。日本はランドフィルがないので。アメリカは全部土に埋めていくんですけど。これ燃やしたことをリサイクルと呼べるんですよ、燃料になりますから。でもその

洋服づくりに使ったエネルギーとか水を考えたらリサイクルなんてものじゃないですよ。これが持続可能じゃないことは明らかなんですけど、そこに向けていろんなアクションをとっていかないと全員共倒れになるなと思います。

なので僕たちはいろいろアクションをこう、パタゴニアは起こしているんですけど、すごい単純に言うと、壊れても捨てないで修理してくださいというのをやっています。今年間で1万5千着くらい鎌倉の直すセンターで直しているんですけど、ご自身でも直していただけるようなコツと一緒に考えるようなイベントなんかもお店でやったりしています。3月の28日に名古屋ストアが、久屋大通のところあるんですけど今改装してますので、改装オープンしたらこんなイベントもやりたいなと思ってますので、是非皆さんいらしてください。

もう一個は直接的な自然保護ですよ。今公共事業っていうと、何となく公共事業って自然を壊して何か新しいコンクリートを作るっていうふうに使われ、そういうことになっているんですけど、むしろダムを撤去したり、今あるものを改装したりという形の公共工事が増えてくるといいんじゃないかなというふうに思っています。そういったことを促進するために、僕たち売り上げの1%を1985年からずっと小さな環境団体に寄付をしてきています。本当に環境団体の方々が、さっき言ったとおり日本で環境というだけでちょっと煙たがられるとか、資金もなくて小さくてローカルで、でも本当に大事な活動をやっぴりされているんですよ、土とか水とか空気を守るために。やっぴりその、政治的立場とか、どの企業にいるとか、職業とかそれから歳に関わらず全員にとっても大事なものというのは、きれいな水と空気と土じゃないですか。なので今ほど彼らを支援することが大事なタイミングは無いなというふうに、僕たちのリーダー、アメリカの社長の女性が言っています。どんなことを日本で支援しているかこのあとちょっとお話ししたいと思います。

三つ目は食品ビジネスっていうものを僕たち開始したんですよ2年前くらいから、洋服屋なのに。基本的には、簡単に言うと有機農業で作ったものをキャンプとか家で食べられるような形にして販売するんですけど。ビールも出しました。ビールがお好きな方は是非、お店でも販売をしていますんで、これはあのちょっとアメリカのよく言う、日本と言うところの地ビールですかね。ちょっとクラフトビールみたいな手作りのビールなんですけど。なんでビールを作ったかと言うと、さっき温暖化の話が出ました。これ皆さんには釈迦に説法みたいになると嫌だなと思うんですけど、僕その温暖化の理屈っていうのはずっと腑に落ちなかったんですよ。

CO₂が増えるっていうのはどういうことだろうということを思っていたんですけど、あるジャーナリストの方に説明を受けてこれはわかりやすいと思ったのは、温室効果ガスっていうのは、メタンとかCO₂の総量っていうのは変わらないんですね、変わってないんですよ。何が変わっているかと言うと、地中の中に閉じこもっている量と、地上に出てきてビニールハウス効果みたいなものをもたらす空気層の、大気圏のところにたまる量のバランスが変わっているんですよ。もともとせっかく化石として地中の中に閉じこもっていた炭素を、

ガソリンとか石油とか石炭をほじくりかえして燃やすからどんだんそれが外に出ているんですよ。それをもう一回地中に閉じ込める力というのはもともとは自然にあった訳なんです。それは一つは海で、もう一つが森とか土なんです。でも海はご存知のとおり人間がいろいろやり過ぎて、今酸性化が進んでもう炭素は吸収できないんですね。その証拠が、サンゴ礁が沖縄でもうほとんど8割以上白化して死んでいるんですよ。

農業も本来は有機農業であれば、窒素とか炭素というのはどんだん根っこの中に閉じ込めてくれるのを、農薬を使いすぎて土がもうそういう機能を失っているんですよ。なので僕たちはこういう農業を増やしていくことで、これは実は麦の一種で、大麦の一種で、僕たちが古代麦をある研究機関と一緒に復活させて、これ単年草っていう、通常麦って毎年毎年刈るじゃないですか。その麦をとってパンにしたりパスタにしたりビールにしたりするんですけど、なんで毎年刈るようになったかと言うと、ちゃんと麦っていうのは頭が良くて、毎年刈られると根っこがあまり伸びないので、これは種の保存の法則で、まずいなくて穂を沢山付けるようになったらしいんですね。昔は多年草って言って、フルーツみたいに毎年毎年麦だけ取って根っこはそのまましておくっていうのがあったらしいんですよ。そうすると根っこがどんだん伸びると、微生物が増えてミミズが増えて土が良くなって、微生物というのは炭素ですからどんだん炭素が増えていくということで、今ビールをやっています。まあちょっと難しい話しちゃったんですけど、おいしいのでよかったですんでください。

それから最後は脱炭素社会、これは愛知県さんでもずっとやってらっしゃいますけど、石炭火力みたいなものはCO₂だけじゃなくて排煙とかね、僕も花粉症がひどいんですけど、この間お医者さんに診てもらったら、辻井君みたいに3種類も4種類も花粉が反応する人はだいたい大きさ同じものが入ってくると全部反応するよと言われて、PM2.5とか黄砂とかもそうなんです。黄砂っていうものは僕自然の現象だと思っていたんですよ。冬になると大西風っていうのが吹いて中国大陸から黄色い砂が飛んでくるんですよ。でも今は3割から4割は石炭火力の排ガスらしいですよ。僕はそれを被害を受けていたりもするし、これからのエネルギー政策はさっき言ったとおり100点満点のものっていうのは無いんですけど、今のものよりもいい可能性があるんだったらそれをやってみて、だめなことがあったらまた直していくという方がいいだろうというふうに考えていて、パタゴニアでも再生可能エネルギー100%っていうのを目指して、他企業なんかとも一緒に活動をしています。

パタゴニアがいくらいろいろ、そうは言ってもほんとに小さい企業ですから、やっても日本の社会変わらないんですけど、例えば今アップルさんとかイケアさんとかリコーさんとか、そういう企業さんと一緒にエネルギー問題については話し合いをしたり、政府に提言書を出したりなんかをすると、徐々に変わっていったり、そのためにはやっぱりお客様をね、パタゴニアいろいろと小難しいこととかお店に行くと言われる時もあるけど、大きい方向だから一緒になんかやろうねって言って下さる方が増えていかないと、いくら一

企業が騒いでもだめなので、僕たちはそういうパートナーを増やしていきたい。それが僕たちがビジネスをやっている理由ですよ。

じゃあちょっと先ほどお見せした自然保護っていうところを抜き出して最後 10 分くらいお話ししたいと思うんですが、森、川、里、海のつながりというものは、本当に人間で言うと多分血液じゃないですか、川って。森の養分を河口まで運んで汽水域で海水と混じって。それをやっぱり分断するっていうことは、血栓ができたりとか、人間の体で言えば不健康になっていくんだらうというふうに思います。僕たちがやっていることを少しご紹介しようと思うんですが、14時20分まででしたっけ。

ちょっと何年前かにダムの映画を作ったんですけど、ご覧になったことがある方いらっしゃいますか。見ていない方も半分くらいいらっしゃるんで、予告編が3分くらいなんですけど、ちょっとそのダムの映画の予告編をここでいったんご覧いただきたいと思います。

(動画再生)

これあのダムネーションというタイトルでパタゴニアが3年から4年前に作った映画なんですけど。ちょっと刺激的な爆破のシーンとか出てきたんですけど。ポイントはアメリカでいろんなことが起きるんですけど、ちゃんとダムが必要だっていう人と、必要じゃないっていう人たちが話し合いをして前に進んでいるというところがすごく大事なかなというふうに思っていて、最後、映画に出ていた先生も言っていましたけど、僕も全部のダムに反対している訳では全然ないんですよ。

変な話なんですけど、うちの親父は昭和8年生まれで、終戦が国民学校6年の時だったんですよ。小学校3年間は福島に疎開をしていて、やっぱり食べ物がなくて畑から生のサツマイモを盗んで、生でかじったりしてっていう話をここ10年くらい聞かしてくれるんですよ。東京に逃げるように引っ越した時には、東京大空襲の直後で、本当にバラック小屋と焼け野原で、そういう時っていうのは社会の要請が安全な水だったりとかエネルギーだったりとか家だったりするので、公共工事っていうのは進んでいくのは自然の流れだと思います。

ところが、そこから70年以上たって、社会の要請が変わっているのに、そのころ作られた計画が見直されないというのは、やっぱり話し合った方がいいなというふうに思うんですよ。一つの事例として、前々回いらした方はお聞きになったかもしれないんですけど、熊本県で日本のダム行政で本当に初めて国交省の予算がついてダム撤去してみようということになった訳なんです。当然これ撤去する前っていうのは、ダムを建設した側と撤去したい市民の側でかなりぶつかり合いがあったんですけど、これあの撤去後ですね、でこれは撤去前。こういう形で地元の建設業者さんがアユの遡上に影響が出ないように、6年かけてかなり丁寧に撤去されたんですよ。これはダム撤去前の河川敷とか法面ですね川の。本当にむき出しだったのがダムを撤去する前です、もう水門開けて3か月ですご

い緑になったり、それから、清流が復活して生き物の数が7倍になるとですねやっぱり魚も増えてくる訳なんですよね。何がびっくりって、河口で青のり業者さんが50年以上なかなか1m以上に伸びないって言っていたのが、3mになってしまったんですね。売り上げが青のりがすごい上がったと。

こうなってくると、地元の人たちもダム撤去をしている業者さんを応援するようになってくるんですよね。僕が聞いたとか見たのは、ダム撤去をしている業者さんのウェブサイトで、今日これくらい壊しましたというのがウェブでアップされて、まわりの方がそれをいいぞいいぞって言って。そうするとあんまり敵も、実際にはいろいろあるんですけど、全体の方向性としてはいい方向に進んでいった、そういう事例があるんですよね。

こういうことが本当に公共事業の新しい形になっていくと、割と自然資源というもの、自然資本というものを無駄にせず安心して暮らしていけるようになるんじゃないかと思えます。実際には洪水の数もこれ減っていますので。ダムをせき止めると何が起きるかという30年前にダムの容量というのは半分以下になるんですよね、流木だったりヘドロだったりとか。そうすると大雨が降ると、ダムが決壊しないように門を開門してヘドロが下に流れて、それが地域の人々を2回にわたって本当にひどい被害をもたらしたんですけど、そういうことも無くなった事例です。

もう一個僕たちがこの3年くらい取り組んでいるのが、長崎県で今計画をされている石木ダムという計画なんですけど、聞いたことある方いらっしゃいますか。すごい、なんという知名度。長崎よりも多いかもしれないですこの部屋の方が。石木ダムというのは1962年にもともとは最初に話が持ち上がった計画で、これあの九州の地図ですけど、九州の長崎県のハウステンボスという有名なレジャー施設があるじゃないですか、そのちょっと南に川棚町という町があってですね、その真ん中に川棚川というのが流れているんですよね。これあの愛知県で言うと矢作川みたいな大きさの川で、その河口から2kmのところには小さな石木川という支流が流れて、その2kmいったところに造ろうとしているのが石木ダムなんです。石木川はまあまあ細くて、大体このテーブルくらいが平均で、一番細いと、広いところでもテーブル二つ分くらいですね。そこに今高さが5.5m幅が23.4m、これまだできていないんですけど、国交省のウェブサイトからイメージを持ってきたんですよ。

もともと何でこんなものを作ろうとしているかと言うと、佐世保の水が足りなくなると、佐世保市というのは今26万人くらい人口がいて、有権者人口が21万人くらいなんですけど。高度成長期に水がなくなるだろうということで、1962年に話が持ち上がって、1975年に建設省が認可したんですよ。ところが長崎県というのは、ごめんなさい佐世保市というのは、人口流出が全国市町村第6位という、申し訳ない、かわいそうなとかそういう問題を抱えているんです。だから人口がどんどん減っています。僕、もう一つ川棚川、石木ダムの建設の目的で問題だなと思うのは、なんとなくですけど、この辺の名古屋市内の水が足りないんで刈谷市の山の方の集落を一個沈めようか、という感じなんです。そうするとあんまり関心持たないじゃないですか。東京で言うと銀座の水が足りなくなるか

ら東村山のちょっと集落を一個沈めようか、僕はなんかこれ聞いた時に、さっきの洋服づくりにすごい似ているなどと思って、なんか東京とか都会の人が幸せになるために、本当に遠く離れた人が犠牲になるという構造は20世紀の特徴だなどと思って、そういうこと自体もやっぱり見直していった方がいいんじゃないかなというふうにすごい強く思ったんですね。

もう一個いわゆる長崎県の方は川棚川っていったさっきの本流の洪水を防止しようって、この二つの目的でもう50年以上にわたって造る造らないということをやっている訳なんですよ。これが佐世保市の実際の水の需要の1997年からの実績値なんですけど、どんどんどんどん下がっています。これ人口も下がってますし、それから、節水機器みたいな洗濯機にしろ、食洗器にしろ、ものすごい性能がいいので、昔みたいに水がいらなくなっているんですね。ところが、佐世保市の水道局は「いやいや、ダムができる頃には、需要がめちゃくちゃ上がるので、これは必要です」という。これが根拠になって事業認定がされたっていうダムなんですね。

もう一つはちょっと見づらいですけど、ここにこう、川棚川の本流があって、支流の石木ダム、石木川にダムを造って本流の洪水を止めようっていうのが、流域面積10%ぐらいしかないのに、それ本当に効くのかっていう話があって、まあ、長崎県知事も公の場で河道整備ちゃんとやれば石木ダムなくても洪水起きませんよって一回おっしゃってるんですね。なんですけど、今まだ造ろうとしてる。

もう一個は、さっきもお話したんですけど、これがその小さな集落、水没予定地なんですけれども、ここに53名の方が暮らしてらっしゃるんですよ。これ、僕が調べた、僕とかですかね、いろんな専門家に聞いてみたらですね、日本に今15m以上の高さのいわゆるきちんとしたダムっていうのは2,800基くらいあると言われていて、それよりも低い、河口堰のようなものを入れると98,000くらいあるんですよ。で、もっと、関係省庁だけが管理している治山ダムとか、そういうものを入れると、数十万あると言われてるんですよ。その中で、事業者がですね、力づくで住民を排除して、造ったダムというのは一個もないらしいんですよ。つまり、言い方変えると、事業認定という国がお墨付きを与える、土地収用法という法律がくっついてきますから。土地収用法にのつとるとですね、長崎県はここに住んでいる方、だいたい300年くらい皆さん住んでいるんですけど、その家を書面上で移転できるわけなんですよ。「これ来週から県のものになります」と。で、それは合法的なわけですよ。で、移転すると「あなたは県の家勝手に、不法に住んでることになりますから、出てってください」ということになるんですけど、それでも居続けると、最後は機動隊を導入することができるんですね。これ行政代執行というんですけど、行政代執行でできたダムっていうのは、一個もないらしいんですよ日本に。

もう一個は、事業認定の告示が国からされたにも関わらず、住民側の活動によって、事業主が「これ儲からないから、やっぱやめるか」とか、「もう必要ないからやめるか」とかいう例はあるんですけど、住民との話し合いの中で止まったダムというのも一個もない

らしいんですよ。なんで、これ、長崎の小さな問題に見えるかもしれないんですけど、僕たちは日本の未来の、市民の民主主義のあり方を考えたときに、どっちに転んでも日本初って例になるんですよ。

そういうことで、本当に多くの方々が関心を持ってくださってます。もちろんお金も530億以上掛かって、佐世保の方350億負担するんで、これ水道料金に永遠に乗っかってきますから。で、ダム一回造ると維持費でお金もかかりますし、さっきも言ったとおり、名古屋市の水のために遠くの集落沈めるんで、水を送るだけで年間1億円掛かるんですよ。なんで、そういうこともあんまりご存知ない。で、僕たちがここに活動している方に協力をし始めた中で、一緒にですね、長崎県の2,500人の方に意識調査をしてみたら、石木ダムの必要性、長崎県は「もうずっと説明してきて、県民の8割くらいは納得している」っておっしゃったんですけど、実際には、80%の人はよくわからないと。で、しかも賛成と反対も「圧倒的に賛成が多い」と言っていたんですけども、今もう30%を超えてきているんですよ。

こういったことを長崎の方々に一緒に知っていただくために二つのことをやっているんですが、一つは「#いしきをかえよう」というキャンペーンをやってます。これあの「石木ダム」の「石木」と「意識を変えよう」の「意識」をかけて、なかなか評判がよくて、で、これスマートフォン持っている方はぜひ、Googleで「#いしきをかえよう」と入れてみてください。そうするとかなりわかりやすいサイトが出てきます。僕さっき言ったような理由で、長崎の小さな問題に見えるかもしれないけれど、日本にとって大事な問題だという認識をですね、いろんな方が今、持ってくださっています。俳優の伊勢谷友介さんとか、音楽プロデューサーの小林武史さんもそうですし、つい去年ですけど、坂本龍一さんにお会いしに行って、この話をしたら、「これは本当に大事なことから、僕も協力するよ」ということで、来月、現地でイベントをすることになりました。是非皆さんも一緒に「#いしきをかえよう」チェックをしていただければと思います。

もう一つは、なんとなく抗議活動している人たちって、はちまきして、ゼッケンして、サングラスして、マスクして、なんか怖い、わがままな怖い人たちみたいに、やっぱ長崎の人も思っていたわけなんですよ。「あの人たちが『うん』って言えばダムできたのに、なんで反対してるの」そういうことを、「いや実際は、本当に普通の人たちが突然やってきたダム計画に翻弄されているだけなんです」という映画を作ったんですよ。パタゴニアがというよりは、ここに一緒に行った映画監督さんが「じゃあ、僕映画創ります」と。これ6月から渋谷で封切り、ユーロスペースというところで封切りになるんですけど、もし、愛知県でですね、そういう社会派のいい映画やる映画館あるよっていう方がいらっしやれば、是非、監督に紹介したいので、お声がけいただきたいなと思います。

ということで、この後はですね、僕も実は愛知県の刈谷市にですね、刈谷に3年くらい、1991年から1994年まで住んでまして、長良川よくカヌーやりに行ったり、友達が釣りやりに行ったりして、こういった問題があるのも知ってましたが、その頃はやっぱりここまで

深く考えていなかったんです。なので、本当に今日はこの後、第2部で、当事者の方、専門家の方々と一緒に、これは単なる経済か、自然か、ということを超えて、たぶん人間がこれから自然とどうやって付き合っ、どうやって生きていくのか、っていう話なのかなというふうに思っていますので、第2部を楽しみにしたいと思っています。

ちょっと長くなってしまったんですが、私からの話は以上にさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

(原田委員)

辻井さんありがとうございました。

すごくわかりやすいお話。最初はフェアトレードでのお洋服づくりの、企業としてのお話から始まりまして自然環境活動へと、全てがつながっているということを感じました。

さて、この後は長良川について一緒にお話させていただきます。引き続きよろしくお願いたします。いまから10分間の休憩をとらせていただきます。そして、その後、わいわい談義の今回5回目ということで、パネラーにも辻井支社長に加わっていただきまして、平工さん、鈴木さん、蔵治さん、武藤さん、でお話を進めてまいりたいと思っておりますので、10分間の休憩です。どうぞ第2部からもお願いをいたします。ありがとうございました。休憩に入ります。

(休憩) 15:56~16:05

(原田委員)

皆さん、そろそろお時間の方がやっ、まいりました。第2部、第3部と続いていきますね。どうぞよろしくお願いいたします。

さて第2部はですね、さきほどのパタゴニア日本支社長の辻井隆行さんにもご登壇いただきまして、5名のパネラーとともに、わいわい談義とさせていただこうと思います。

最初に映像を使った自己紹介ということで、ゆいのふね代表の平工顕太郎さんに自己紹介をしていただこうと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

(平工代表)

お顔、見えてますでしょうか。岐阜長良川から参りました、平工顕太郎と申します。平に大工の工と書いて平工というんですけれども、岐阜城の麓の金華山ですね、岐阜城の麓にしかない名前です。岐阜にしかない名前と言われてはいますが、今日は自己紹介に映像使わせてください。

川漁師という紹介をしていただきます。いつも冒頭この話から始めさせていただきますが、県知事がトップセールスで、10年かけて、「清流の国ぎふ」というキャッチをつくりました。この、岐阜長良川の水の恵をもらって、いろんな産業が発達して、また、水物流

の拠点の川ですので、美濃和紙をはじめ、いろんな工芸品なんかも発達しましたが、そのど真ん中で生きている漁業者、どれくらいいるのかというと、なかなか川漁師というのは少なくてですね、岐阜の町でこの職業を名乗るといのは、非常に勇気がいります。何回でも言わせてください今日この話から始めさせていただきますが、家に船もあって、漁具もあって捕る技術もあって、卸先も人脈もある人たちが、川漁師という看板を今、背負わずに、陸にあがって仕事をしています。生計がたてられません。50代から60代の方々はまだまだ、ごろごろとしています。そんな中で、自分のように親が漁師じゃないような新参者が、この職業を名乗るといのは非常に厳しい現実がありまして、岐阜の言葉で「たわけ、とろくさいもん」と言われながら、まだ、今日もこの仕事をやっています。

この船着き場の風景です。皆さんが、なんとなく馴染みがあるのは、この矢印の場所ですが、ちょっとこの山、覚えててください。もう少し日を暗く、夜に向けてやってみますね。だいたい皆さんご存じなのはこういった風景でしょう。「長良川鵜飼」と同じ場所に船を構えて、唯一の競合他社はたぶん鵜匠さんだと思います。鵜匠と競合しながら、天然のアユを追いかける漁師をやっています。鵜匠一人では、鵜飼いというのは行いませんので、専属の船頭が2人乗り込みます。一昨年まで、僕はですね、この右の背中を向けているのが私の仕事でした。長良川の鵜飼いは宮内庁式部職鵜匠といい、鵜匠が捕ったアユは皇室の行事ごとに使われます。6艘の鵜船が横一列に隊列を組む「総がらみ」。その中で、日陰の日の当たらない部分で、いつも船を操っている仕事をしておりました。岐阜の言葉で準備することを「まわす」といいますが、「船まわし」といって、まだまだ、今ぐらいの時間から仕事は始まり、こんな、船に鵜を担ぎこんでいくシーンなんですけれど、こんな仕事を一昨年までやっていましたが、実は、伝統漁法というのは、鵜飼いが有名ですが、それ以外に、今からお見せします、アユだけで、だいたい19の漁法が今、長良川には残されています。例えば、投げ網の中でいくと、「投網」は皆さんぴんときますが、実は長良で「投網」はあんまりポピュラーじゃありません。「テーナ」という網だとか、船から投げる「船投げ」とか、また夜になれば「火振り夜川」、濁った日には「中猟」ということで、実は僕らには定刻という概念はなくてですね、今日みたいな天気の良い日か、雨の日か、また水が透明なのか濁っているのか、その水がさらに上水（あげみず）、増水時なのか、引水（ひきみず）なのかによって、ここから漁法を選択して、24時間アユを捕ることができないと、この職業はとてとても勤まりません。

今、こちらで下線を引いた三つの漁法だけ、少し映像で流していきます。下から二番目「ぼうちょう網漁」と一番上「テーナ漁」、そして最後「瀬張網漁」あんまり馴染みのない漁法だと思いますが、ちょっと見てみてください。季節でいうと、春、夏、秋の順番に映像流していきます。長良川は海と川がつながっていますので、その象徴である天然アユは、春先、このような光景を私たちに見せてくれます。見えてますでしょうか、画面中央。まだまだ僕たちのくるぶしぐらいの水深です。水かさみてください、水がないですよ。くるぶしぐらいのところを、こういった真っ黒になったアユが上ってくるところから始まり

ますので、僕ら漁師にとって天然アユというのは、海から上ってくる天然遡上アユを指しています。じゃ、このアユをどうやって捕るのか。

これが「ぼうちょう網」といいまして、非常に貴重な漁法です。今残っている漁師はこの一組だけです。竹竿の先端に黒い布を付けてます。まるで、鶉がアユを襲っているかのような。人間がそれを醸し出しながら、アユをコントロールして、追い込んでいきます。もう一回見せます。非常に難しい漁法ですので、息が合っていないと、つまり一人でも竿使いが弱いと、その人間の足元をさっきの群れが逃げていきます。非常に難しい漁法だといわれています「ぼうちょう網漁」。

季節は変わり、夏。夏になるとですね。一匹かなり高い金額で取引されますので、先ほどのように群れで捕らなくて、一匹、狙っていきます。静かに川に立ちこんでですね、これ「テーナ漁」と言いますが、目の前で一匹見つけたら、もう一対一の勝負です。網をバツと、分度器の外周のようにワツと広げることによって、そこのアユに網を被せて、きれいなアユを捕っていきます。こうやって捕られたアユは築地ではだいたい卸値 2,500 円とされています。

今度、季節は変わりまして、もう鶉飼も終わった秋、11月頃、「瀬張網漁」というのが現れます。なかなか見たことないと思いますが、川底にいっぱい、川幅いっぱい白いビニール敷いてます。水中の映像、きっとアユにはこんな感じで見えているんじゃないでしょうかね。上に水面、下に川底。今、アユの性格は産卵場所に向かって、集団で産卵を迎えようとしてますが、その矢先にこんな光景が広がります。これ今、川底の白だけじゃなく、水面も見ててください。僕らは音と色と光で魚を捕りますが、画面中央、見えてますか。漁師の目になってください。「瀬張網」といっても網はどこにも仕掛けられてません。左が上流、右が下流。アユの動きを封じ込んで、さっきの網で捕っていきます。ひと網で四、五十、一晩で千匹でも、捕れと言われれば捕ります。というように、僕ら漁業者というのは、一年の中で、春先、僕の手の平です。春先10月のアユから始まり、夏の立派なアユから、お正月前の子持ちアユまでを常に、24時間体制で捕っていくのが僕らの仕事になってます。

冒頭のお写真、実は、今年の夏、最後になります。船を一つ手に入れました。さっき辻井さんの方から話ありましたが、人が自然の中に入ると、やっぱり負荷が掛かります。が、その負荷を最小限に抑えながら、最大限の保全に向けた活動まで、エコツーリズムの概念を少し取り入れたようなエコツアーを今は現場の漁業者という立場で展開してます。なかなか漁業といってもですね、市場に依存していても生活が続かずに、今はこういった観光事業だとか、6次産業いろんなことをやりながら、なんとか漁業者として、職業川漁師というのをつないでいます。まずは自己紹介、それほどにさせてください。平工と申します。よろしくお願ひ致します。

(原田委員)

平工さんありがとうございました。美しい長良川の映像と共に、川でのお魚を捕る方法がよく伝わってきました。ありがとうございました。

それでは、お待たせをしました。わいわい談義の先生方、どうぞお席の方に、檀上の方におあがりください。お願いをいたします。

まず、こちらから、先ほど講演していただきました辻井社長、そして平工さん、鈴木先生、それから武藤先生、蔵治先生、お願いいたします。それと今回の運営をしてきました山本委員と私、原田が進行をしたいと思えます。お願いいたします。

さて、ここから平工さんの自己紹介していただきましたので、続きましては鈴木先生お願いいたします。

(鈴木委員)

皆さんこんにちは。座って少し自己紹介をさせていただきます。私は、名古屋にいます名城大学で学生を教えている者でございます。私が、今まで、今もですが、関わっている事というのは、三河湾と伊勢湾の漁業の環境という事なんですけど、時間もあまりないので、少し最近のトピックをご紹介して自己紹介にかえさせていただきます。

たとえば、三河湾というのは、ご存じのように、日本最大のアサリの漁場である。そのアサリの漁場を支えているのは、二つの川、矢作川と豊川の河口に発達する干潟なんです。豊川の河口の六条干潟がありますけど、ここで 3,000t から 5,000t ぐらいのアサリの赤ちゃんを取って、伊勢湾や三河湾に放流して、それを 1 年、1 年半かけて日本一の漁獲を上げている。したがって、豊川や矢作川の河口の干潟は愛知県の漁業にとっては、一番大事な場所なんです。

最近調べられて、なぜ河口の干潟にアサリの稚貝が大量に発生するのか。このメカニズムというのが、あまりわかっていなかった。いろいろ調べてみますと、春、4 月から 5 月にどこからかわからないのだけど干潟に稚貝が入ってくる。アサリの赤ちゃんは水の中を漂うプランクトン生活をしているから、水の中から干潟に入って、そこを住みかにしていて思っていたが、そういうアサリもいるんですけど、かなりの量がどこからか、干潟に集まってくるのです。それがどこから集まってくるのか調べてみますと、河口域なんです。川と海との境目を河口域と言いますが、もしくは、川の中、当然、塩の濃度がなければいけませんけど、何らかの要因で干潟に一举に入ってくる。一举に入ってくる力とは何なのかということが、次に不思議になるんですけど、これは春の出水なんです。春にどっと雨が降って流量が増して、そのことによって、一举に川の中や河口域にいた冬を越した小さなアサリが干潟に大量に加入してくる。こういうことがわかった。

もう一つ問題になる。なぜ、河口域だけアサリの稚貝が冬を越せるのか。このことも重要なんですけど、二つの要因があって、水温が他の海域よりも好適であるということと、アサリの稚貝が食べるエサというの非常に限られていて、クリプト藻という 10 μm 以下の藻

類があり、そういのを食べていて、それが河口域に集中して発生する。だから、水温がいい、エサ関係がいいということで冬を越し、それが、春の出水で一気に拡散していく。こういう図式が見えてきたとういことは、その上流にダム等ができて、出水の時期をカットするとか、ダムができることによって水が滞留して、クリプト藻のようなアサリの稚貝が食べる植物プランクトンが発生しにくくなったら、また、水温が変わったとしたら、たいへんなことになるわけです。

ところが、そういう事に対して、今まで何ら影響評価はされていないのに、環境評価においてダムと言うのは何ら海には影響ありませんという図式ができ上がって河道の付け替え工事ができて住民の移転工事が進み、ダム本体の工事が着々と準備されている。しかしながら下流の漁業者は具体的な交渉にも参加していない。こういう状況の中で、先ほど荒瀬ダムと球磨川の話が出ましたが、ああいう話は非常に重要ですが、やってみないとわからないということでは困るのです。今、ある程度の情報があるわけで、それを国交省も我々も漁業者も認識した上で、話し合いながら妥当な未来を作っていくことが必要でないかな。そんなことに最近関わっている鈴木でございます。よろしくお願いします。

(原田委員)

鈴木先生、よろしくお願いします。続きましては、武藤先生お願いします。

(武藤委員)

長良川市民学習会の武藤です。座って自己紹介させていただきます。私は、長良川市民学習会の事務局長をやっておりますが、この市民学習会とはどういう団体かという、実は出発点は、「長良川に徳山ダムの水は要らない」市民学習会実行委員会からです。長良川に徳山ダムからの水が引かれる導水路に反対するという団体なんですけど、実際には長良川を守るという団体です。2007年に、徳山ダムから木曾川へ導水路計画ができました。その時僕がびっくりしたのは、その途中で長良川に水を流すという計画があることを知ったのです。

全国的に長良川河口堰の建設反対運動もあったのですが、長良川に関しては地域では清流を守るという意識が根付いています。先ほどの平工さんの映像にもありますが、河口堰がありながら、なんであんなにきれいなのかと思われるかもしれませんが、実は長良川には上流、本流にはダムはありません。このような川はもう日本にはほとんどありません。木曾川と比べても分かります。揖斐川と比べても分かります。大正や昭和の時代にダムがあっちこちに造られました。ところが長良川だけなのです。あのような光景、たとえば長良川のアユの産卵は40万都市のあの地域でほとんどされるような、それぐらい貴重な川なのです。私たちはなんでこんなところにこんな導水路工事が計画されるのかと、水資源機構や国交省、岐阜県に対して、いろいろ交渉してきました。

だんだんわかってきたのは、この事業で長良川に流すというのは、河口堰の水利権、使

っていない水利権を上乗せしてやろうという計画が裏にあるということが検討会の議論でもわかりました。河口堰の問題も導水路の問題も一緒であるということです。今の状況だけ言っときますと、河口堰については開門調査を実現しようと、私たちは、後でも議論していきますけど、去年お招きした韓国釜山市でも開門調査の実施が始まっています。その辺の話も後で出しますが、導水路の問題につきましては、民主党政権ができた時に、全国で約30のダム、ハッ場ダムや設楽ダムもそうでしたが、検証の対象になった。そのほとんどが、継続になることは予想どおりでした。ところが、木曾川水系連絡導水路は、なぜか、やるもやらないも検討中のままなんです。会議も約2年開かれてない。これどういう状況か不思議ですけど、私たちこの問題について今しっかり考えていかないといけないと問題意識を持っています。

河口堰で言えば、愛知県民や名古屋市民は、この建設費の23年間、県も市も支払いは終わりました。たとえば名古屋については、1滴も使っていません。ローンを返したのに使ってない河口堰をこれからどうするのか。どうなるのでしょうか。使わずに8億円から10億円の維持管理費がいるんです。名古屋市民は1滴も使わずに、これからもずっと払っていくのか。そういう議論もしていかなければと思います。その辺の詳しい話は議論の中でやっていきたいと思います。自己紹介として、このような話をさせていただきました。

(原田委員)

はい、ありがとうございます。市民の目線から行ってきたことを、また後程お願いします。では、蔵治先生お願いします。

(蔵治委員)

最後になりましたが、東京大学の蔵治です。座って自己紹介させていただきます。

今、ここに5人がパネリストの形で座っているのですが、この5名のうち最初の2人はゲストの方、残り3人の鈴木さん、武藤さん、私は愛知県長良川河口堰最適運用検討委員会の委員をしております。この最適運用検討委員会が今回の主催者です。この委員会は愛知県知事が設置した委員会で、その事務局として土地水資源課が担当されています。この講座の第1回の時には、大村知事自らいらして、挨拶をされています。今日が最終回ということで、もう一度大村知事がいらっしゃるのかと期待してましたが、残念ながら、ご多忙のようです。大村知事が当選され、愛知県知事になられてからずっとこの問題に、選挙の公約にもなっていましたけれども、きちんと実行しようと努力されているので、まず最初に敬意を表したいと思います。

私は、大村知事が当選された直後に行われたプロジェクトチームからずっと関わって今に至っています。私今は、大学の方の事情もあって東京の方に勤務していますが、2005年から2017年までの13年間は愛知県にあります附属演習林というところに勤めておりました。愛知県及び近隣の県の森林とその川のつながりを研究してまいりましたので、その関

係で長良川の委員会の委員も務めていることになります。私の専門は、もちろん演習林の職員ですので、森林全般に係ることですけれども、特に森林の水源涵養機能と言われている洪水を軽減し、水資源を涵養し、私たちに安全で安心快適な生活をもたらしてくれる水と森林の関わりを専門としております。

そういうこともありまして、2003年に愛知県に来てから、私の問題意識は先ほどのパタゴニアさんの話と共通しておりまして、人工的にダムを造ってきて、水資源開発及び洪水軽減のためということであったけれども、その一方で森林にも緑のダムとしての機能があるわけで、その機能をきちんと評価した上で、ほんとうにそのダムが必要か必要でないかを話し合うべきであろう、ということで、当初、愛知県に来たばかりの時は、熊本の球磨川の川辺川ダムというプロジェクトに関わったり、あるいは四国の吉野川の河口域に可動堰を新たに造ろうと、長良川河口堰のようなものを新たに造ろうという計画もございまして、そこでも可動堰を造るか森林の働きにもっと期待するか議論がされましたので、そういったことに関わっていました。そうしているうちに、自分が勤めている愛知県でも、同様のことが話題となり始めましたので関わってきているということになります。

パタゴニアさんの話を伺いまして感銘を受けたのですが一番強く感じたことは、今日の話は主に衣食住の中で、衣と食が多かったかなと思います。森林の世界で働いていまずと、森林からの主要な産物は木材ですので、住と関係しているわけです。住の世界でも、実は全く同じことが起きていると改めて感じたわけです。日本の森林、大変広い面積に沢山の木が植わっていて、膨大な量の樹木が山に生えています。ところが、日本人は全然有効的に利用できていないのが現実です。なぜ、そうなったかを分析していくとやはり家を建てる時に、消費者の方々、あるいはそれを販売しているハウスメーカーの方々が安いものを求めすぎていることがあると思うんですね。安いものを求めていくことによって、結局その森林を所有している方々やその森林で木を伐って丸太を出している素材生産業者にもものすごくしわ寄せがいつている。

そういう問題は、発展途上国と先進国の間の問題はもちろんあるんですが、日本国内でも実際に長良川の上流域の森林の中でそういうことがもう起きていて、その結果、日本の木を切って利用しようという人がいなくなりつつあるのだらうと思います。そういう意味で衣食住すべてにおいて同じ問題がグローバルスケールあるいは流域の上流下流スケールで起きていることを非常に強く感じました。そういう観点から、もちろん長良川河口堰そのものも大事なんですけれども、上流の森林を資源としてどう生かしていくか、それを、どうその上流で生きている方々が幸せに生きていくことに、つなげていけるかという観点から今日お話しできればと思います。

(原田委員)

ありがとうございます。まさに、森から海へつながる森、川、里、海つながりと、先ほど辻井さんにもご講演いただきましたけれども、ぐるっとめぐってきました。辻井社長、

皆さんのコメントを聞いていかがでしたでしょうか。

(辻井支社長)

本当に原田さんのおっしゃられたとおり、多分同じ事象を違う角度から皆さんこう見られているんだなど。特に、僕も森林の所については関心が高くて、僕の花粉症もこれは人災ではないのかと思ひ、やっぱり植林政策のしわ寄せが、いろんな形でやっぱり来ているのでしょうし。後は、日本という国がこの後どうやって自立、日本の安全保障という話によくなるんですけれども。そもそも食べる物と住む場所と着る物が国内で全部手に入れば、そんなに別に、いろんなことを気にしなくてもいいのではと思うんですけど。ほとんどが輸入に頼っているところも心配だなというのを、お話を聞いて改めて思いましたね。

(原田委員)

今日5回目ということで、1回目から4回目をよく覚えていらっしゃるよという方、手を上げてください。第何回が印象深かったでしょうかね。1回目が良かったという人。2回目が良かったという人。3回目が良かったという人。4回目が良かったという人。4回目手が上がりました。今から1から4まで担当されましたパネラーの先生方にお話を聞いていくわけなんですね。

平工さんをご登壇されたのが第1回目だったんですね。その時は、かわいい鶺も一緒に出てくれて、もちろん口の中にアユはいませんが。鶺匠とはこういうものですよ、そして川漁についてお話をいただいて。その時は、木曾川の鶺飼いさん達が来たんですよ。その時師匠の大橋さんが道具を持ってこられたりして、今日、平工さんも川漁の道具を持ってきてくださっているということで。

(平工代表)

あります。

(原田委員)

ちょっとそれを見せていただきながら、この第1回目を振り返っていただけるといいなと思います。実際、第1回目のタイトルが「今を生きる 逞しき伝統美 “鶺飼：川漁”」でした。ご登壇された時の印象はいかがでしたでしょうか？

(平工代表)

その時には、今の木曾川の女性のきらびやかな美人鶺匠さんがいらっしやっただのと、あとは、小瀬からも宮内庁式部職鶺匠が来られまして、まさに鶺飼漁をかなり深く掘り下げてお話をされたと思います。鶺飼漁は世襲制ですので、歌舞伎のようなイメージ、その家に生まれたものが継ぐ仕事ですので、先ほども言いましたが、僕なんかその家に生まれて

いない人間は、なかなか鵜飼いというものは携わることができないんですが、実は、漁の世界、鵜飼も漁師も変わりません。同じ道具を使います。

例えば、冒頭見せたお写真の船、コウヤマキという木を使うのが私たちのプライドです。檜風呂よりもワンランク上のコウヤマキですね。秋篠宮悠仁様のお印になっているその木を使うのが僕らの文化です。船に溜まった水、雨水ですね。雨が降れば海の船のように自動的に出ませんので僕らは「垢とり」という、こういった道具を使って手で水を掻き出す。これが僕らの営みの一つなんです。つまり船を持ったりするとですね、もう暮らしの一部になってしましまして、僕も第1回登壇してから今日まで月日流れましたが、一年二年の間に身近な漁業者、もう何人か実は他界してます。

さっきお話ししましたが、僕の一個上66歳なんです。漁業の世界、そこから上の人ばかりで、毎年毎年この世を身近な方々が去っていく。そうするとどうなるか。船、その人が大事にしていた船は、家族にとって荷物です、処分の対象です。漁具、コツコツ作りためた網、倉庫いっぱい網も粗大ごみになっちゃいます。つまり五・六十年の方が積み上げてきたものが一瞬にしてこの世から去るんです。口うるさかった爺さんたちの残したものですけど、なんか身近で見ると、すごいさみしいなという気持ちに自然になってきますので。僕なんか、好きで始めた仕事ですけど、なんかこう年を重ねてくるとですね、どっちかっていうと、そういった大事なものをつないでいかなければいけないなという心持に、鵜飼に携わってそういった部分を感じました。

(原田委員)

この時、確か、世界農業遺産に認定を受けるちょっと前だったんですよね。その後、認定されましたね、いかがですか？

(平工代表)

そうですね2015年ですね。もう世間は歓喜の渦、万歳三唱で。背広を着た方々が万歳万歳してました。あれから2年、漁業者から現場の話をさせてください。何の恩恵も受けてないどころか、卸値が、当時より低い。これは何でか。

(原田委員)

何ですか。

(平工代表)

末端価格は高くなっていますが、市場で僕らの魚は安い。これセイロ箱。これにいっぱいアユを敷き詰めて市場に出すんです。岐阜にしか天然アユのセリ台ってないんです。全国で。そんな日本のアユ市場をつかさどっている岐阜が、世界農業遺産をとってから、安くなっているなんておかしいです。

(原田委員)

そうですね。

(平工代表)

もちろんそこで潤ってる方がどんな方々かっていうのは、すぐに見当が付きますけど。もちろんそれがきて、街にお金が落ちて、物産展や料理屋さんが潤ってますが。ちょっと、現場の漁師さんたちは、人数が少なすぎますし、戦力もないもので、どうしてもどうしてもというのが現実です。

(原田委員)

せっかく世界遺産をとっても、まだまだ問題が、自分ごとに皆がなっていないということなのかもしれないですけども。

(平工代表)

僕らが賢くならなくてはいけないというのを痛感しました。

(原田委員)

あと、継承していく大変さ、また引き続き後で、コメント頂きたいんですけども。

さて、第2回目はですね、ウナギを通じて「食」から長良川を考えました。もちろん参加者の皆さんウナギをいただいてもらうというチャンスはなかったんですけども、小伴天の長田料理長さんお越しいただきお話をさせていただきました。そして、鈴木先生にもお話をいただきました。鈴木先生、ウナギを美味しく食べたいです。

(鈴木委員)

原田さん、そう言われるけど、ウナギはもう来年くらいから食べられなくなるんじゃないのかな。

(原田委員)

早いですね。もう来年はだめですか先生。

(鈴木委員)

私はですね、思うんですよ。ウナギの資源が減ってきている、特にウナギの養殖は鹿児島とか愛知県、これ全国有数ですけども、シラスを河口で獲ってもらって、それを池に入れて、餌を与えて半年ちょっとで、大きくして出荷するという、こういうことなんですけど。そのシラスが急激に減ってきている中で、特に今年は獲れないと、こういうことで、ほとんど養殖採算ベースでやるだけの稚魚が集まらないということで、大変漁業者の方々、

養殖漁業者の方々が心配してみえる。それ以上に心配してみえるのが、多分小伴店の若社長さんじゃないのかなと。

(原田委員)

ということは、鰻屋さんは、大丈夫ですか。

(鈴木委員)

鰻屋さんは、大丈夫ではないですね。今は、ほとんどのウナギの種というのが、日本産ウナギしか食材としては使っていないんですけど、日本産ウナギ以外にも使えるんじゃないかという人もいますけども、例えば、ニューギニアの方で獲れるウナギですとか、アフリカの方のウナギとか、確かに、そういったところで一定の調達が可能かもしれませんが、ちょっと私も参考程度に食べてみたことがあるけど、とてもじゃないけど食べられた代物ではない。歯ごたえが、まず固くてですね、いずれにしてもですね、日本のウナギというものは、非常に養殖技術が進んでまして、価格も上のウナギで 3,000 円以上しますが、3,000 円出しても食べたいと思うものはウナギくらいですよ。私も、ウナギは大好きですから、たまに贅沢するとき食べに行きますけども、これからは、お金を出しても多分食べられなくなる可能性が本当にあると思いますよ。

(原田委員)

それが私たちの身近な川や森や海の環境と大きく影響してきている。

(鈴木委員)

その原因はなんなのかなということについては、いろいろ意見が分かれているところですが、私には根幹にあるのは、今年だけの話ではないんですよ。実は、昨年もその前も減ってきているんですよ。なぜかというのは、一つはやはり河口域、ウナギは海から川に上って、川から海へ下って深海まで行くという生活周をもっている非常に偉大な魚ですけど。その川から海、海から川へ上がる時に浸透圧調整といって、その外海の水の塩分と体の中の塩分とをうまく調整してから川へ上がったたり、海へ下ったりするんですけども、その調整する場所が河口域なんです。先ほど、アサリの河口域というのが、ものすごく重要だと言いましたが、その川と海との接点というのは、ものすごくウナギにとって大切なんですけども。今どの川に行かれてもわかるけれども、例えば、堰があり、それから川の右岸左岸は三面張りのコンクリートだと。それから波よけのテトラポットがごろごろ並んでいると、そんなストレートな海にですね、海域にウナギが生息できるわけがない。

(原田委員)

人々はみんな美味しいものが大好きな「食いしん坊」のはずなのに、「食いしん坊」の方

をなぜ優先しなかったんでしょうね。

(鈴木委員)

なぜでしょうね。

(原田委員)

だから、美味しいものを食べるためにもっと必死になってもいいのかもしれないですね。

(鈴木委員)

日本人というか、私たちもそうですけども、自分に何か災難が、火の粉が降りかからないと人ごとなんですよ。

(原田委員)

じゃあ、ウナギをきっかけに。

(鈴木委員)

私はね、今回のウナギが獲れない、ウナギがひよっとしたら厳しくなる。ウナギを食べさせる方々が大変危機感を持たれるということは、ある意味、当然の成り行きかなと思いますし、ここで、この危機をやはり乗り越えるような動きをされないと、日本の食生活からウナギというものが消えると思いますね。これは私、今までいろんなことを予測してきましたけれども、あまり外れたことがないわけで、このウナギの問題もですね、本当に身近な問題としてとらえられて、河口域ですね、具体的には例えば、長良川の河口堰ですとか、ダムですとか、そういう河川構築物、それから川の防災という名で造られているコンクリート化というのを何とか上手くしていくという努力に、皆さん方の力を貸していただかないと、大変なことになるなど、私は、危惧しております。今日の晩御飯はウナギを食べようかなと。

(原田委員)

コンクリートの中でウナギは住みたくないわけですね。

(鈴木委員)

それは誰もそうですし。やはり餌が沢山ある場所で生活するわけですから、生物というのは、コンクリートを張ったようなところにエビやカニや小魚はいませんので。

(原田委員)

それでは武藤さん、お願いします。長良川市民学習会の活動を通じて、森から海につな

がる長良川を、ずっと見守ってらっしゃって、美味しいものも食べたいし、そして川遊びもいろいろと案内されていたり、そして、その市民の交流として韓国のナクトンガンまで行かれているんですよね。最新情報をお話頂きたいと思います。

(武藤委員)

じゃあ、最新情報を踏まえてというか、実はですね、昨年12月に諫早の裁判の弁護士さんと、それからナクトンガン、釜山市のNGOの方を招いて「開門シンポジウム」をやりました。この最適運用委員会も第3回連続講座で釜山の気候環境局長を呼んで講演を受けました。この1、2年で韓国の情勢が本当に変わりました。この日本はですね、2009年ぐらいから、特に2010年名古屋でCOP10が開かれた時、名古屋だけではなくて、日本全体が生物多様性とか、環境をこうしていこうというロマンや夢がありました。そういうエネルギーによって、愛知県知事も名古屋市長も重大環境政策ということで、長良川河口堰の開門調査というのを出したんですよね。それくらい盛り上がってました。

そんな中、私たちはCOP10の名古屋会議で、韓国の河川環境団体の方と交流できました。例えば、河口堰についていえば、長良川河口堰より10年前に韓国では建設されているのですね。全斗煥軍事政権の時に。そして、イ・ミョンバク政権の時に、ちょうど2009年頃でしたけど、河口堰より上流に、3年か4年で八つのダムを一気に造るんですよ、長良川河口堰規模の。なんというひどい国だと思いました。それぐらいの差があって、私たちは、韓国にこういう運動やっているとか、環境を守る運動をやっているということで、呼ばれたりしてたんです。ところがこれが、今は、逆。日本はですね、残念ながら、さっきのダム見直しじゃないですけど、今までダム中止が確実にあったダムも、今復活しようとしています。大戸川ダムなどいろんな形で。ところが、韓国の方は政権が代わりました。前政権のもとで、釜山のナクトンガンでは八つのダムができて、今まで以上に環境が悪くなったわけですね。これで一気に環境保護の運動が盛り上がり、河口堰開門運動も、これがまたすごい運動となりました。特に、運動が強くなったのが、2012年ぐらいからですから、その変わり方はすごいです。

政権が変わる前から釜山市はもう、開門について市長が宣言するようなことをやりました。環境省は河口堰の開門調査について手伝いました。ところがですね、環境省がやってくれたのは良かったんですけど、これは、シミュレーションなんです。実際に開けてないんです。開けようとした時に反対しているのが、日本の国土交通省と一緒に国土省なんですね。国土省が、どうしても河口堰を開けて調査するようなことはならないということであったんですけど、今度の政権の中でムンジェインという大統領は、釜山市出身でもあり、河口堰開門の公約で当選した人ですので、これで一気に開門調査も実現してきました。

昨年の私たちの開門シンポジウムの時にも、シンポジウムの前日に釜山市役所から私どもの方に、市民学習会の方に、今、記者会見をやって、開門調査を實際やるというマスコミ

発表したそのままの資料を送ってくれました。実質、開門調査は昨年秋から始まりました。全面的に開門するのは2025年に全面開門、ということで進めていくということです。はっきり言って、すごいなと思いつつも、国の性質とか市民運動の流れで、こんなに一つのことが変わっていくのかが、本当にわかり、引き続き頑張らないかなというふうに、思いました。特にその中で思ったのは釜山市役所の職員の方ともずっと交流してきたんですけど、行政と話し合いながらやってるっていう、釜山のというか韓国の人たちの、NGOのエネルギーやその努力はすごいなと思いました。

(原田委員)

ちょうど3回目の講座の時にどちらが先に開門できるか、頑張らしようって。

(武藤委員)

なんて言っていましたけど、軽く向こうはクリアしてもう開門調査は実現。いよいよ本格開門をどうするかという段階に入っています。国全体ももう環境省とか何々省で分断して河川を管理するんじゃなくて、今後、行政として、この河口域については一つとしてこう一本化していく。そういう方向で今、国全体も動いているという、そういう中での動きでした。

(原田委員)

国も市民運動も一緒にということですね。

(武藤委員)

そうですね。はい。一緒になってやっていく。

(原田委員)

この時の講座のタイトルに「開けゴマ 川と海 ぎっしり詰まった宝よ出てこい」でした。

辻井さん、河口堰を開門すると宝が出てくるぞという意味のタイトルでしたが、パタゴニアさんでもおいしい食べ物を始めていらっしゃるということでやっぱり食べ物のことを考えるのは大事ですね。身近な地域で自然の中から取れるものをおいしくいただくということにパタゴニアさんでも力を入れていらっしゃると思います。

(辻井支社長)

僕たちが今関わっている食品でいうと、日本で作っているものを日本で販売できていないので、地産地消という意味では何かできていない訳じゃ全然ないですよ。

ただ、日本のその有機農業の割合っていうのは0.5%ぐらいっていうふうに言われていて、

これはちょっと、先進国の中でもかなり心配な数字で。なので、身近なところで取るってのももちろんですけど、さっきの伝統っていう話で言えば、有機じゃない野菜作りなんて言うのはちょっと前までは本当はなかったわけで、200年、農薬ができてからの話ですから、そこの本来の人間と土の関係とか、人間と川との関係とか、人間と河口の関係とか、人間と森の関係っていうものを取り戻すっていうのはすごい大事なことだと思います。

(原田委員)

それで蔵治さん戻りますよ。第4回目は「水は賢く大切に使う時代がきた」というタイトルで、水の賢い使い方を議論しました。そのとき、蔵治さん、ご講演していただきました。そのお話はとても面白かったんですけども。

(蔵治委員)

はい、この時は、水を使うことを焦点として話しましたが、やはり、この連続講座は、流域の生き物、生活環境ってことでやってきましたが、生活に関わるものとして、やはり水は非常に大事な部分です。繰り返しますが、この講座、愛知県が主催でやっていますが、なぜ愛知県内に長良川が流れていないのに、愛知県が長良川の講座を開くのかという一つの理由は、愛知県民のかなりの方々が、長良川から水をいただいて、それを水道水として飲んでいることにあるわけです。長良川流域の生活の講座に水を取り上げるのはそういう意味でも、愛知県主催の講座ですので、ふさわしいと思います。もともと、長良川河口堰の主要な目的は水資源を開発する施設であって、国が定めた計画、木曾川水系全体の計画に基づいて、これだけの水をこの地域で使う、その水を供給しなければならない。供給するためにはこれだけの施設が必要だっていう論理になっているわけです。

この時の4回目の講座では、3人の方がお話されました。最初に話された岐阜大学の富樫先生は、そもそもどういう計画でこれまで動いてきているのか、計画の中で想定されているこの地域の水の使う量と実態はどれだけ合っていたのか、あるいは合ってなかったのかをお話されました。それでわかったことは、その計画では水需要を過大に想定していた部分があって、実際はそんなに水は沢山使わなかったってことです。それだったら、今後、例えばさらに10年間の計画を立てるんだったら、そんなに使わないって事を前提とした計画をきちんと立てる方がいいんじゃないか、という提案をされたと思います。

では、なぜ私たちはそれほど水を使わなくなってきたのかについて、福岡女子大学から豊貞先生がいらっしゃいまして、非常に詳しく、その根拠、理由をきちんと話されました。彼女はリクシルに勤めてらっしゃったということで、節水型のトイレであるとか、そういう技術開発をされていたわけです。その経験を活かされて、今は大学で、節水型の機器を入れることによって、これだけ水の量を減らすことができる、私たちの生活の利便性を落とすことなく、少ない水で、快適に暮らせます、という科学的証拠を示されました。その

結果、私たちの水の消費量、需要量っていうのは、一人あたりに換算すれば、減少傾向にありますし、さらに、人口も今後減っていけば、なおさら減っていくということです。

最後に、私がお話させていただいたのは、渇水とつきあう知恵ですけども、私たち、毎年のように6月ぐらいになるとテレビでよくニュースに出てくる、水源地のダムで取水制限を始めましたっていうニュースで必ず、水位が下がって底が見えてしまっているダム湖の映像が出てくるのをご存知だと思います。あれは取水制限ですが、私たちは取水制限という報道を聞くと、これは渇水の大被害が起きるんじゃないかと誤解してしまっていると思います。私の話では、渇水の被害と取水制限は全然同じものではないことをご説明しました。取水制限は、ダムの貯水量は雨が少なければ減っていくのは当然ですけども、それをできるだけ賢く長持ちさせるために、ダムから取る水を減らしましょうっていう予防的な措置としてやっているもので、仮にその後、ずっと雨が降らなければもちろん、ダム湖の水量はさらに減っていきますけれども、雨がその後降ってくれば予防的な措置をしたおかげもあって、結局、被害はなくて済むという、人間の知恵です。

実際には下流で水道水を供給している水道事業体さんは、余裕を持っていらっしゃるので、10%の取水制限がかかったとしても、それが即、各家庭への水道水の給水の制限っていうところにつながるということにはなりにくい。20%ぐらいになれば、給水の圧力を下げるということも少しはありますけども、その被害は非常に局所的で、日常生活に著しい支障をきたしたり、金銭的に何億円って損害が出たりするわけではないので、平成6年みたいな非常に極端な状況であればまた別問題ですけども、渇水被害というものにはいろんなレベルがあって渇水被害をできるだけ起こさない知恵として施設を造ってきたし、取水制限という対応も今できているから、私たちは平成6年以降それほど深刻な渇水被害を経験せずに今までやってきたこととお話しました。

これは長良川流域の生活というところに関わる部分ですけども、河口堰の今後のあり方を考える上で、決して他人事ではなく、私たちの生活と河口堰は密接につながっていると、講座でアピール、提案できたのかなと思っているところです。

(原田委員)

生活者の目線が大事になってくる。渇水と節水の違いをちゃんと学ぶということですか、それと、面白い検証結果も教えていただきましたよね。トイレとか洗濯機事情も時代とともに進化し、節水機能が優れてきているので、あまり水を使用しないということ。ライフスタイルが変わり、技術も進化しています。

辻井さん、皆さん世界や地域の課題をまずは知ってもらうために、いろいろな活動を、パタゴニアさんではしていらっしゃると思いますので、そのあたりのお話、お願いします。生活者目線で自然への問題を意識してもらうということ。とてもうまく展開してらっしゃるんじゃないかなと思いますけれども。

(辻井支社長)

やっぱりすごく難しい問題で、先生もおっしゃってましたけど、人間ってやっぱ自分にこう被害が直接くるとか、自分が直接得するってこと以外はなかなかやっぱり、頭ではああそうだなと思ってもなんか行動に移すってことはやっぱりすごく難しいなというふうに感じてます。

先ほど、長崎県の石木ダムの問題でも、やっぱりその、ほんとに直接53名の故郷を失うかもしれない方々と、かなり懇意になったりすると、やっぱり動きだすんですけど、そのストーリーを聞いたときやっぱかわいそうだなと思っても、翌日から何か動くかって言うとそうでもないってのが、いろんな形のアンケートとか、活動の中で見えてきたんですね。

やっぱり一番大事なことは、最終的にはこれはもう人と人の関係とか自分が直接、なんて言うんですかね、身近に感じれるかどうかってことなので、長良川の問題で言えば、僕たちも久屋大通にお店を構えさせていただいているので、そこを中心にやっぱいろんな方と関わっていくのが、すごい大事なかなと思っていて、3月28日から展示もやらさせていただくことになっているので、長良川河口堰についての。そういうところに人が集まってきて、一緒にいろんな話しをやっぱりそういうレベルでコミュニケーションを取らないと、これ一個やっつけば解決だ、みたいなことっていうことはやっぱりないのかなと思います。

(原田委員)

専門家の方々や、行政の方々にお任せしっぱなしではなく、私たち市民も一緒に話し合い、自分ごととして考えたいと思います。まさに、ナクトンガンがうまくいったのはそこかもしれないですもんね。私たちも市民として生活者目線で未来を考えられましたらとの思いで、連続講座を開いてまいりました。

ここからは、山本委員に質問していただきたいと思います。

(山本委員)

山本敏哉と申します。よろしく申し上げます。私は、普段は隣の矢作川で魚の研究をしております。その関係でちょっとマニアックな視点になるかもしれませんが、今日、ご登壇の皆様にご挨拶してお尋ねしていきたいと思っております。まず、魚つながりということでは、平工さんにお伺いしたいんですけども、矢作川、今年は遡上数は平年より少し多め、天然アユの遡上数ですね、平年より多め、しかし、サイズがべらぼうに大きくてですね、私たちが調査してる限り過去最大のサイズでした。長良川もですね、結構アユの量が多かったと釣り人からも聞いたりしているのですが、状況、どうでしたかねえ。

(平工代表)

すごいうらやましいなと思って聞いてますが、私含め、漁師、鵜匠、口そろえて言うの

は、アユは小さい。その一言ですね。資源量とか市場が持つてゐる漁獲量でいくと、遡上数もですけど多かったですね、ご存じですかね、漁協も資源を担うために放流をしています。カテゴリーでいくと義務放流といって、やはりよそからお金が入ってきますと、そのお金を使って資源を戻してください。これが義務放流というカテゴリーなんですけど、かなり入れてます。なので、アユの生態を知ってる方はわかると思いますが、えさの一等地って川幅が一定にあったとしても、そのえさの一等地って限られてくる訳ですよ。流速とか酸素量、いいえさは限られてます。そこからあふれると二等地、三等地、そこからあふれたアユは本来野生の縄張りを持つことができず、群れて生活しますので、一つのこういった石についたコケをみんなでなめ合うみたいな。資源は多いけどサイズが小さいってのが長良川のもう、それが郡上の釣り人であろうと、中央漁協の鶴匠であろうと、僕ら長良の漁師の共通の認識でした。

もっと具体的に言うと、私たち網を使う、クジラっていう尺を採用しています。鯨尺、着物を図る寸法のクジラを使って、「八分とか九分の網」っていう言い方をするので、アユも八分のアユとか九分のアユって市場に出すんですけど、だいたい普通だと一寸一分とか、まあ体高ですね、体高がそれなりに大きいのがあっていい時期に、八分使ってますし、一番アユが大きくなきゃいけない秋の落ちアユの時期に八分五厘使ったりとか。

(山本委員)

やっぱり小さかった。

(平工代表)

小さい小さい。それが長良の今年の現状です。

(山本委員)

そうですか。

(平工代表)

大きいのはもちろん否定する訳ではない。大きいのはいますよ。もちろんいますけれども、全体的に数は多いけどサイズは小さいのが僕らの川の現状です。

(山本委員)

じゃあ豊漁だという感覚はなかったということですかね。

(平工代表)

もう一つ、天然遡上であっても魚が多すぎていいえさ場に行けなかったのかなあ、みたいなことは推測できます。放流で数が多すぎて本来の野生のDNAが本来の石の位置につ

けなかった。本来、そこまでいけますよ。

(山本委員)

ありがとうございます。矢作川ですね、実は大きいアユが上ってきたわけですが、全然釣れない状態です。流域の釣り人、アユの釣り師は軒並み、今年、長良川は最高だったとゆうようなコメントをですね、先週お伺いしています。悪いと伺ってるんですけど、我々の川と比較すると断然、断トツでいいなという形を保ってますので。

(平工代表)

補足させてください。さっき、僕も市場にほとんど毎日出入りしています。さっきのセイロ箱で、市場の出荷されているのを毎日見ているので、競りの時間の朝6時から15分くらいで終わるので毎日毎日行って市場の動向を見てますが、この目で見えていますけどほんとに郡上の友釣りのアユが小さい。ってのはもう印象的になります。もしかしたらですけど、郡上のいいアユは市場を経由せずに今、直でいいところに下ろしているってのも一つ原因あると思いますが、岐阜の市場に入ってくる魚はそんなにそんなになってことが僕の主観的な感想です。

(山本委員)

ありがとうございます。続きまして辻井さんにお伺いしたいんですけども、私時々ヨーロッパに行ってますね、向こうの自然再生、すごい先進的なこと色々やっているので、勉強しに行ってるんですけど、やっぱり寄付の文化が結構向こう盛んだなと。例えば、道を歩いててもですね、やっぱり、お金をせがんで来る人が結構いるんですよ。日本ってあんまりそういうことないので、私もびっくりしたりするんですけど、さらに驚くのは結構向こうの人は、それに対してお金を渡すんですね。「ちょっとコーヒー買うお金がないからくれんか」とか依頼があってもですね、なんか時々渡しているのを見たことあるし、なんか寄付の違いがあるかなと思います。

寄付の活動から成り立つ自然保護活動といえば NGO 活動なんかそうだと思うんですけども、辻井さんの会社では売り上げの一部をそういう活動団体へ寄付されているというお話を伺いましたが、そういったことを普段されている中で、こういった団体だったらいいのになとか、例えば川の環境を守る団体に対して、こうした活動をやってるところがあったらいいのになと思うことってあるんでしょうか。

(辻井支社長)

そうですね。ありますね。あの、アメリカとかヨーロッパのいわゆる非営利団体、NGO と NPO と日本の状況でやっぱり一番違うのは、ちょっと言い方を付けないといけないんですけど、NGO とかと NPO の地位がやっぱり相対的に高いんですよ。だから、普通にあの一般企

業から NGO に転職したり、NGO から企業に転職するってことも行われていたり、あとやっぱり、日本の NPO、NGO の方々とお話すると、何かこう利益っていうものに対しての、すごい拒否反応みたいな、お金は汚いものみたいなのが凄くあって、そうすると結果として、やってる方が食べていけないじゃないですか。だから、やっぱり組織としてきちんと自立できる。そのためには基本的には目的が異なるだけで、運営形態とかっていうのは企業がやってるようなレベルでやっぱりきちんとやっていくっていうのは、これから凄く大事になってくるかなというふうに思ってます。

なんで僕たちも、単に売り上げの 1% を、じゃあここに 100 万円、ここに 50 万円っていうふうに寄付しているだけでは難しいなとすごく思っていて、だから実際には、お金がこう、お金と一緒に技術とか知識とかスキルとか組織論とかマーケティングとかファンドレイズ、いろんなことを一緒になってやっていくというのが大事だと思ってるんで、何か幅広くいろんなものにといいよりは少しターゲットを決めて、かなり中長期的な視点で自分たちも一緒になって関わっていくっていうのが、一番、ヨーロッパやアメリカや例えばオーストラリアとかのパタゴニアが地元の方々と関わっていく、関わり方の中で違う点かなと感じがしています。

(山本委員)

じゃあ、もっともっと日本の NGO、NPO とかが大きくなって行ってですね。組織的なしっかりしたものになっていくと。

(辻井支社長)

支援していくことが企業に限らず行政も民間の人達も、もっともっと支援していく、その 1 つの方法が民間の方々による、たぶん、寄付っていう行為だと思うんですけど、やっぱり、一番寄付したくないのって、自分のお金が何に使われているかわかんないっていうのが一番嫌じゃないですか。それはまあ問題外で、次に嫌なのが、お金寄付しても寄付しても何も状況が変わらない。

(山本委員)

見えないってことですね。

(辻井支社長)

100 人シンポジウムやりましたとか、1,000 人集まりましたと言われても、その問題は怎么样了んですか。何かその 2 段階、両方ともまだまだ不十分かなという感じがします。

(山本委員)

私を感じていた、向こうで感じたことと似ているところがあるので。

(辻井支社長)

あと、もう1個だけ、ちょっと長くなっちゃってあれですけど、すいません。

坂本龍一さんとこないだお会いして、石木ダムのことお伝えして、最後におっしゃったのはやっぱりニューヨークにずっと住んでいらっしゃるんですね90年代から。ニューヨークでは、レオナルド・ディカプリオもそうですし、著名人とか、あと企業でビジネスに成功したフェイスブックの創業者とか、著名人なのに環境活動とか社会活動やってないと、あいつやばいよねってことになる。日本は著名人とか芸能人が環境とか原発のこととか言うなあいつやばいよってなるじゃないですか。

そういうところも、やっぱり何かこう、変わっていくと、格好いい芸能人とか、格好いい著名人とか、格好いいビジネスで成功した人の像っていうのは、やっぱり社会性のある人達っていうのはできてきて欲しいし、僕たちもそこ支援して行きたいなと思います。

(山本委員)

これからじゃあ並行して積み上がっていけばいいなってところですね。ありがとうございます。

では、続いてですね、委員の方3名に少しずつ。短時間でちょっとお答えを頂きたいことがあるんですけども、基調講演の中でもですね、荒瀬ダムの話があってですね、ダムを撤去したら、ノリの成長がすごい良くなったとかいう効果が出ているという話を聞いて、すごいなと思ってるんですが、昨年私が訪問した場所に、フランスの南東部ですか。フランス第二の町リヨンという町があるんですけども、そこから車で2時間ぐらい行ったところにですね、ロワール川流域のフテツダムというのがあります。このダムあんまり日本では知られていないんですが、ヨーロッパでは凄い一大プロジェクトとして注目を浴びているんですが、ダムをなくすのではなくてですね、ダムを改造して発電機能を持ったダムなんですけども、発電機能は80数%は保ちつつ、回遊魚をですね、ほぼストレスなしに、上がって下るといような構造にしているというプロジェクトで、大変ユニークなプロジェクトがあります。

矢作川というのはですね、実は、ダム七つあるんですが、どれも結構使われているダムで、皆やっぱり大事だなと思っているところあるので、そういったダムと共存しながら河川環境を抜本的に改善するという取り組み、非常に興味を持って見ているんですけども、向こうに行つてですね、「何でこんなことができたんですか」ということをですね、聞きました。中心になって研究しているのは、実は発電会社の人達で。電力会社にですね、生態学者が十数人雇われてですね、その人たちが魚の生態とか研究したり、ダムをこうしたら、こうなるよっていう研究しているんですけど、一番大事だったのは、話をして感じたことは、お金のことだったかなと思います。お金がどこから確保されるのかというと税金が投入されるということで、はっきりとした数字は聞かなかつたんですけども、半分ぐらいです、たぶん、解体して作り直す費用の内、半分ぐらいは税金から出てるよ。というよう

なことを聞きました。でもですね、残念ながら日本ではですね、そういったことに対して税金がなかなか付きにくい状況になるかと思えますし、やっぱり、長良川河口堰の問題、いろんなダムの開発問題についても、なかなかことが進展していかないなというふうなことを感じています。

そこで3人の方にお伺いしたいんですけども、なんか日本の状況をぐっと変えていくにはですね、何がこの日本に欠けているのか。あるいは、何があったら進んでもうちょっと進んで行くのかということですね、ちょっと時間の関係もあるので、1分ぐらいずつですね、1分以内でですね、お伺いできたらいいなと思うんですけども。

まず鈴木先生からですね、河口の問題とかいろいろ話して、今ですね、いろんなところで遠吠えされている。問題を大きく指摘されてる方だと思うんですけども、鈴木先生から見たご意見、お考えあるでしょうか。

(鈴木委員)

難しいですね。教えて欲しいよね。やっぱり、先ほどパタゴニアの辻井さん言われたけど、少しこの日本のね、例えばこう環境、例えば堰がどうだ、ダムがどうだっていうようなところで、当然賛成する人もいれば、反対する人もいる。また、それを見守っている人達も様々いるんだけど、何かね、私なんか思うのは、反対している人達はやばい人達たちだっている、何かそういうようなレッテルがこの辺にちらほら、ちらほらしているんですよ。私は、あんまり素行がいい方じゃないからやばいと言われれば、やばいかもしれないけど、もう少し科学的な根拠を揃えてね。

例えば先ほどの河口堰の問題でね、例えば今、私は豊川で何とか調査をしてみると河口域というのは、非常に二枚貝、特にアサリにとって必要な場所であると。で、それを支えているのが川なんだということがやっとわかってきたんですけど、たぶん長良川河口堰を造る時の論議で、例えば下流の食べるシジミとかアサリとかですね、ハマグリとかどうなるかっていう話について、そんなに緻密な、たぶん調査っていうのはされてないんですよ。されてないまま、できてしまった。で、結果、やはり今あんまり芳しくないことが続いているわけですよ。

ただ、そういうことも含めてあまりにも情報がない中で、賛成だ反対だとかこういうようなことを、やはりその、今の日本というのは現実にそうなって、そういう論議を嫌う傾向がある。それにも増して悪いのは、そういう論議が今やられるべきはずなのに、環境影響評価っていう一つのシステムで、小島座長、昔、環境省におみえになったと思いますけど、環境影響評価って既に答えが書いてあるわけですよ。影響は軽微って。そういうシステムの中で、先に法律上の整備がされちゃって、「そうなるのに何をがたがた言ってるんですか」というのが今の風土ですよ。私はこういうことを是正していかない限り、次の河口堰、次のダムまたできちゃう。

これは、研究者というか、学者に対しても言いたいのは、いい加減なことを言うなど、

私も学者の端くれっちゃ端くれだけど、あまりにもずさんな評価をし過ぎているんじゃないのかというふうに私は思います。もう少し地元の漁業者の方々から、川や海に親しんで見える方々から意見を聞いて、それを参考にしつつ学術的な研究評価の中で、どうなのかっていうことを判断していかないと、なんか私なんか海でいろいろ関わっていると、漁師の人達が、漁業者の人達がああ言うと、私たち、漁業者の人達ってあんまり、この方は大変上手くしゃべられるけど、口下手なんです。そういう中で、そういう漁業者の方たちの経験則っていうのはほとんど無視して、なんか非科学的だと言うような雰囲気がある。

こういう風潮ってのは何かね上から目線の学者の、バカ学者ばかりいるからそういうふうになるんですよ。

(山本委員)

じゃ学者のレベルを上げるということと、活動のすそ野を広げて、活動自体をあまり過激じゃない、全うな活動というのをも広めていく必要があるかなというところですね。ありがとうございます。

お時間がなくなってきてしまったんですけど、武藤さん次お願いいたします。

(武藤委員)

先ほどの NGO の関係で言われたですけど、実は長良川市民学習会もパタゴニアから助成金を受けています。初めて受ける時には、「企業から金を貰うことはどうかな」という人もやっぱりいるものです。ピュアっていうかね。献身的にやるものなんだっていうのが、やっぱりあるんです。

日本の環境運動の NGO を見ると、割り切って行政の補助金を受けて、行政と一緒にやってくる。そうすると、一切、行政の施策に反対するようなことは言えない、そういう NGO になっちゃうのは日本のシステム。じゃ私たちのような公共事業について反対することを旗幟鮮明にするような団体だと、パタゴニアさんの（助成基準）だったら旗幟鮮明にしたほうがいくらいなのですが、そういう助成金ってなかなかないですよ。それで韓国の市民団体ですが、行政にも深く入りこんでいるですけど、各地域にお邪魔すると、やっぱり、河川関係の環境団体の事務所をちゃんと持っているんですよ。

会員何万人とか、そういうのを持ってる。こうなると何が違ってくるといって若いスタッフが持てるんですよ。その辺のところ、日本では、大学の研究室やなんかを出て、もうどこにも行けないっていうことが多いですよ。研究はしたいけれど、環境運動はしたいけれど、結局、収入がないからということで、離れていく。環境団体が金を持って、就職先となるなら、安定するんですよ。運動も幅もその広がる。そういうふうに、韓国はなんとかとやっていると感じました。

それからもう一つはやっぱり、行政と話し合いながらすすめること。私たちは河口堰撤去とかそんな過激なことを直ぐにと言っただけではない。最適運用っていうかね、

こういうふうにかけて、こういうふうには潮を入れてどうだとかいうような話し合いに、そういう姿勢が私達にあるのに、国とか水機構の中に、そういう姿勢ないっていうのが非常に残念です。

韓国のセマングムとか、それからもう一つ、シファ湖というところがあるんですけど、あそこなんかは干満差が8mから9mあるんですよ。そこを締め切っちゃったんで、環境悪化したんです。石木ダムと一緒に住民を強制的に住民を追い出したところなんですけれど、そこも行政との話し合いの中で、その後、そこに潮を入れて、発電所を造って、(今世界で2番目ぐらいの潮力発電所で私たちも見学しましたけど)進めています。こうが駄目ならこうしようっていう相談とか、話し合いは私たちの姿勢にあるんだけど、なかなか今の行政の姿勢は、反対というような言葉を書くようなNGOに対しては、真正面に話し合いの場を持って頂けない。意見を取り入れてもらえないんじゃないのかなと思ってます。

(山本委員)

はい、ありがとうございます。最後、蔵治さん。一言お願いします。

(蔵治委員)

私、矢作川とももう10年以上関わっています。矢作川は日本の河川の中で、非常に先進的な活動等が行われてきた川だと認識されていますが、その原動力はどこにあるかといったら、全て自力でやる体質があるということだと思うんです。日本のほとんどの他の地域では、お上依存体質というものが強すぎるのかなと思うんです。私は東京に今勤めていて、いわゆるお上に近いところにいますが、お上は国会議員が束になってかかってもどうにもならない巨大な力で動いているようなところもあって、なかなか変えるのは難しいかなと思いますが、それとは違う地域の独自性を発揮しようと思ったら自力でやるしかありません。

だからその依存体質を脱却するような何か、そういう頑張りが各地域に必要で、それには当然、地域密着型学者みたいな人も必要ですが、東京大学が若い優秀な高校生を全部東京に連れてきちゃうというのも私は大きな問題だと思っていて、東京大学はちゃんと4年間お預かりした後それぞれの地元で、優秀な人を返すっていう仕組みを作らないと地域密着型学者でできていけないという問題があります。

もう一つは、私達の森林・林業の分野だとご存じのように、森林環境税が報道されていまして、国家が皆さん全員の住民税から1,000円ずつ取りたてて、6百数十億円という金を、今度は各市町村に贈与するという政策をやりはじめるんですが、お金だけではできたわけですが、残念ながらそのお金が配られたとしても、たぶん森林の問題は簡単には解決しない。だから、お金があれば解決するという問題でもない。

そこにさらに必要なのはやっぱり人材なのかなと。いろんな意味での人材。行政側でも学者でもあるいは市民、NGOレベルでもいろんな意味での人材が、やっぱり地方にはどうし

でも足りなくて、それは中央に吸い上げられていることが問題なのかな。というふうに思います。

(山本委員)

やっぱりその、人の活動の問題、人の意識の問題というところに行きつくでしょうか。はい、ご意見ありがとうございました。

(原田委員)

まとめて下さってありがとうございます。さて、ここからは質問を会場から受け付けたと思います。お願いします。

(参加者A)

岐阜から来ました高木といいます。武藤さんに質問です。先ほど韓国では調査が始まったというふうにおっしゃっていましたが、具体的にどんな調査が行われているかわかりますか。

(原田委員)

はい、武藤さん開門調査が始まったこと教えてください。

(武藤委員)

やっぱり一番心配するのは、長良川河口堰と一緒に反対する人たちには農業の問題があるんですね。それはシミュレーションではわからないので、そこで絶対被害はでないような形でやるために今水質調査ポイントを小まめに作っていくようなところから始めてます。ところが長良川河口堰の場合、水質ポイントはきちんとできてますので、開門調査しようと思えば長良川はすぐできると思うし、韓国の方も長良川はすぐできるんじゃないですかとは言っていました。

(原田委員)

高木さんよろしいですか。はい、他にありましたらどうぞ。

(参加者B)

私、今回初めて参加させていただいたんですが、私がちょうど1週間ぐらい前にですね新聞を見てましてこの会議があるということわかったんですね。私は岐阜県郡上郡出身なんです。そして私も小学校4年生からアユ釣りをしていました。そして長良川のあのすばらしさは本当にもう心から十分に本当にもう愛しています。そんなところにあのダムができてから、アユの遡上悪くなった。そしてウナギの遡上が悪くなった。そしてちょっと

あのはっきりとした名前はわからないんですけども、私は小さい小学校のときにヤマトリミンカという魚がいたんですね。それもほとんどいなくなりました。ちょうどヤマトリミンカというのは正式名はちょっとわからないんですけども、もう本当にウナギとよく似た美味しい魚でした。

そうした遡上が一切なくなっただけというにも関わらず、私も学歴もすべて最低の中学しかおいてないもんですから、はっきりしたそういう河口堰ができたそういう仕切りは一切わからないんですけども、できてからそういうふうな遡上もすべて長良川がちょっとだめになった。そうした中で少しの発表で今、河口堰のお水を使っているところがないんだよというのを私も聞いたことがあります。だったらなぜ、早くもっともっと愛知県民の皆さんにもっと手広く案内をして、こういう会議もいっぱい来ていただいて地域の住民に皆さんでどうしたらいいかをもう一度やってもらったらどうかと私はそういうふうに考えています。

(原田委員)

ありがとうございます。5回行ってきた連続講座でまさにおっしゃるとおりで、このあとの答えは座長の小島さんがしっかりと答えてくださると思います。未来の展望も含めて。本当にありがとうございます。ご質問じゃなくてご感想で受け止めてよしかったですかね。ありがとうございます。

この後、小島座長からまた話がありますので、では、最後に皆さん一言、今後のことなど含めてお言葉頂けますでしょうか。では、蔵治さんから。

(蔵治委員)

今日は長良川の魅力を語りつくすというのがテーマなので、まだ全然それを語れてなかったんですけど。長良川の流域に最初に行ったのがたぶん中学校の頃だったと思うんですけど、全然この地域のこと知らなかったんですが、当時、まだ、越美南線と言っていた時代ですね。越美北線から九頭竜湖を越えて来て、すごく感激したのを覚えているんです。長良川の上流域というのはすごい感動的な景色なんです。行ってみれば誰でもわかると思うんですけど、ああいうすばらしいところだから、逆にダムを造る場所もなかったのも、ダムができなかったと思うんですけど、本当に全ての日本人に見て欲しいところですし、世界中の人に見てもらいたいし、日本の宝なんじゃないかと、宝であり文化そのものだというのが私は長良川の魅力だと思っています。

(原田委員)

貴重な話、ありがとうございました。武藤さんお願いします。

(武藤委員)

長良川の魅力と言え、たとえば岐阜県では選挙で清流って言えば当選できるというか、なんでもかんでも岐阜県政は清流というのをまず付けるんですよね。それくらいもう長良川は清流というふうな形で、清流の国何何、清流の国何何。ところが清流長良川で、なんで愛知県なんだと。ここに見えてる方にあると思うんですけど。この清流、ダムのない清流の長良川に河口堰を造ったもしくは建設するとき一時10年間ぐらいゴーと言いながら作れなかったときに三重県はもう工業用水がいらないといい出して渋ったんですね。そのときにどうしても造ろうじゃないかと言ったのが愛知県なんです。だから今の河口堰を建設するに当っては愛知県っていうのはものすごく責任があるんですよね。

その結果、費用負担は、国はもちろん治水ということで35%、そして愛知県は30%、名古屋は5%ぐらい、三重が15%ぐらいかな。というふうになっているんです。それが今度は、維持費もそのままの割合であるわけですよ。そうするとこの河口堰を生かすも殺すも、殺すのはどういう判断するかわかりませんが、維持するのも殺すのも愛知県民なり、愛知県がしっかりしないといけませんので、河口堰について開門調査を早くしたいと思うんです。是非、河口堰が他の県の問題だということじゃなくて愛知県が自分の県民にですね責任持ってこれをどうしていくのか示していく。そういう時代に入っているというふうに思っていた方がいいと思います。

河口堰もこれからガタが来ますし放っておけばぼろぼろになる。これどうするのかと、もう23年のローンが終わっちゃって、修理するのか壊すのか、そういう時代に入っていくわけですから。名古屋は一滴も使っていないのに、使わないうちに壊れちゃったマンションにずっと金払っていくのかという状況ですので、真剣に考えないといけないと思います。

(原田委員)

はい、ありがとうございます。では、鈴木先生お願いします。

(鈴木委員)

長良川河口堰の開門の調査の必要性というのは、私は理屈上そういうことは当然やるべきという意見が多いと思います。ただ、海の漁業者が少し心配してみえるのは、すでに建設から時間がかかり経っていて底質が非常に悪くなっていると、俗に言うヘドロが溜まっていると。開門することによってそのヘドロが海の漁場に到達して現在の生産でも苦しいのに、それで漁業生産が停滞する可能性があるのかないのか。この部分が大変心配してみえるんです。一時的にはそういうことはたぶんあると思うんですが、それは一体どの程度のものなのかということと事前にやはり開門を調査する中でもいいですけど、やはり同時にそういう調査もしたうえで上下流一体となって開門をするというスキームが必要なんじゃないのかなというふうに私は今、思っております。

それからもう一つだけ、今日、長良川流域の最後の講座なんですけど。設楽ダムの問題

というのが私、頭の中から離れないんですよ。私自身、非常に腹立たしいなと思うのは既成事実化なんですよ。徐々に徐々に工事を進め、また住民の様々なインフラの整備をやったり住居の移動もやったりして既成事実化をしてしまうという過程の中で、反対の声を封じるというやり方が、これは私はですね、日本という国にはあってはならんことだと思う。最後まできちんと論議をし尽くしたうえでやるべきだと。そうでないとすべてお金を持って事業を、予算をつける側の人間の自由になってしまうわけで。現実にも今、設楽ダムもですね様々な工事が進んでいるわけですよ。某学者さんはですね、ここまでできたんだから仕方ないじゃないかということと言われる。もう腹立たしい限りだね。最後に愚痴言わしてもらいました。

(原田委員)

鈴木先生ありがとうございました。

平工さんお待たせを致しました。自然を愛するとイケメンになってくってことですね。女性の参加者が多いような気がしますけど平工さん、これからは世代交代を受け継ぐ側としても重荷もいっぱいあると思いますけど、恩恵もたくさんあるのかな期待をしています。

(平工代表)

こんな平成の時代にですけれど、時代は変わっても僕たちそういった木の船に乗って竹の竿差して、ハタ櫂の木でできた櫂を使って船を漕いだり魚を捕ったりという暮らしをしていますし、船がありますとね、どうしても暮らしと川が密着しててね。さっき辻井さんから「お休みありますか」と聞かれて、「漁に休みはないですよ」って言ったら「台風が休みですか」って投げかけられましたけど台風が来ると三日三晩、僕家にも帰らずに、風呂にも入らずに船をお守りしなきゃいけないんですね。

そういった暮らしをしていますとどうしても天気にも左右されて、水辺とかその源である山にね、どうしても願い事をするしかなくなってくるとですね、少しずつですけどこの町もちょっと見上げれば白い山が見えますけど、やはり霊峰白山っていう水の恵みを僕たちいただいて平野の人間生きてます。白山ですごくて僕ら美濃には長良川がありますが、加賀には手取川、越前には九頭竜川と、そういった水の恵みをいただいて生活してるんだなと、ちょっとずつですけど古き日本人の心がちょっとずつちょっとずつ今、わかってきたような感じがするので、僕なんかは今さっき時代に併せていろんな事業を変えながら職業としての川漁師を続けてますが、もっともっと身近な暮らしを丁寧にすることがひいては川を守ること、そしてこの川で栄えてきた産業を守ること、川を守るってことに直結するんじゃないかなっていうのを最後に感想ですけど。

(原田委員)

ありがとうございます。では、辻井さんお願いします。

(辻井支社長)

今日は本当にいろいろ勉強になる話をいただいてありがとうございました。僕は一時、海で乗るカヌーっていうのに夢中になってまして、いわゆる瀬の落ち込みでぐるぐる回ったりするのをずっとやってたんですよ。やっぱり思えば長良川はコンノウェーブっていうすごく有名な波が立つところがあって、美並っていう道の駅があって僕は今だと怒られるかもしれないですが、豊のところがあってそこによく寝袋で勝手に泊まらせてもらって朝になったらカヌーやるっていうのをずっとやってました。一方で僕はそのとき住んでいたのは東京なので、東京だと多摩川っていうところで、奥多摩でやっぱりカヌーをやるんですよ。そのときにどれくらい今日水量があるだろうっていうのを一応、カヌーっていうのは水の量とかにすごく左右されて遊べたり遊べなかったりするんですけど。今考えると本当に不自然なんですけど国交省のウェブサイトで今日は小河内ダムから100万 m^3 水が流れてる、よし最高だとか言って今日はいい波が立ってるとか言って遊んでたんですよ。今思うとなんて不自然なことなんだろうと。やっぱり長良川考えるとそのダムはないわけですから、天然の流れであれだけの素晴らしい場所があって。ただ残念なことに最後の最後の、奥多摩の場合は上流で止めちゃってるわけなんですけど、やっぱり最後の汽水域の一番大事なところに堰がある。いろんなリスクを鈴木先生おっしゃっていて海の漁師さんのリスクも含めて本当にその補償する形で、一時はそのヘドロが流れてもしかしたら影響が出ると思うんですけど、さっきのダムネーションっていう映画の中でも何回も何回も出てくるんですけど100年間ずっとあったダムを壊した3年後には鮭が1,000倍になって戻って来ているっていう例が実際にやっぱりあって、違う個体にも関わらず100年間ずっと鮭がコンクリートに頭をぶつけ続けてるわけなんですよ。それはやっぱり自然の力っていうのは見くびっちゃいけないと思いますし、是非開門っていうのを実現、なったらいいなと僕も願ってますしできることやりたいなというふうに思います。

もう一つは先ほどね、何で話し合いをしないんだというコメント、郡上でお育ちになった方おっしゃってましたけど、本当に僕もそう思っていて今日は本当に長良川の話なんですけどさっきの石木ダムの話で言うと長崎県民110万人くらいいて全く知られてない中で決めたお金が決めたように50年経っても何にも変更なく使われていくっていうことが起きていて今、ちょうどさっきの意識を変えようっていうウェブサイトでは実は署名をお願いしてるんですけど、これ反対の署名じゃないんですよ。石木ダム反対して下さいっていうのじゃなくて人口3万人以上の市町村で賛成の推進側と反対の人たちが一堂に会して、市民の人たちの前でわかりやすく議論してください。そのうえで決めたらどうですかっただけの署名ですので、是非スマートフォンとか難しいかもしれませんが意識を変えようっていうのだけメモっていただいてウェブからでも署名もできますし、あと、お店に行っていたら用紙も28日以降は置いておきますので、是非そちらもご協力いただければそういうなんか話し合う文化っていうのが日本の各地で広まっていくといいなと願ってます。ありがとうございます。

(原田委員)

ありがとうございます。わいわい談義これにて終了とさせていただきます。皆さんにもう一度盛大な拍手をお願いいたします。辻井さん、平工さん、鈴木先生、武藤先生、蔵治先生ありがとうございました。

ではですね、我らが座長、小島敏郎座長によります最後のまとめとなります。では、座長お願いをいたします。

(小島座長)

愛知県長良川河口堰最適運用検討委員会という漢字ばかり並んでいる長い検討委員会の座長をしております小島と申します。プロフィールはチラシの方に書いてありますけど、旭丘高校を出て東大に行って環境省にずっと勤務をしておりました。35年勤めていて、2008年に退官をしたと。その後、青山学院大学に行きました。フリーになったのでですね、途端に河村たかしさんがですね、名古屋市長選に出るといっているのでそれを手伝ったのが名古屋の、この話の縁ですね。

もともと私と河村市長はですね旭丘高校の同級生で高校のときからの友達だったんですが、何でこんなことを始めたかという、なぜ大村知事が長良川河口堰もやろうやということになったかという、その原点は藤前干潟の保全なんですね。私がですね環境庁の職員のときに藤前干潟をゴミで埋めるっていうそういう話がありました。藤前の保全活動を一生懸命やってこられた方、それから環境庁の自然保護局の職員も何とかしたい。という若い人がいてですね、で何とかならないかなということでも名古屋市議会、愛知県議会、愛知県出身の国会議員全員あたってですね。全部埋めると、ゴミで埋めると市議会全員そうでしたね、県議会全員そうでしたね、国会議員もそうでした。自民党も民主党もみんなそう。これじゃなんともならないなということで、誰か国会議員一人くらい反対してくれないかなと、埋めちゃいかんと言う人がいないかなということで河村たかしのところへ行っていてですね、お前どうだねという話をしたら、やっぱり埋めても10年で終わっちゃうしじゃ守ろうという話が成立してですね、ようやく国会議員で藤前干潟を埋めちゃいかんと言うのが一人でできた。

河村たかしは当時民主党の議員だったので誰かおらんかということでですね、ここでもっていいよと言ったのが大村秀章だったんですね。愛知県の選出の議員でこの二人だけが藤前干潟を守ると言ってくれた。二人でですね。そういう意味ではそっからの仲ということで、たまたま河村たかしが市長になり、大村秀章が知事になるということでこの河口堰やろうやということで始まったというのが経緯です。

先ほどいろんなことが話されたんですが、役所側がですね、もう粘り強い訳ですね。10年でも20年でも30年でも造ると決めたら造るわけですよ。反対する側はですね1年、2年やっとうまくいかないですね、やっぱり無理かなと思ったりあるいは新聞なんかも河村さん大村さん頑張ってるのに全然開門調査できんじゃないかと言って叩いてみ

たりとかですね、そういうことになるんですが造る方は何年経っても造るんだぞという強い意志がある訳ですから、開けるぞという方も何年経っても開けるぞという強い意志がないと到底かなわないんですね。役所の方はですね、議論しないんですよ。議論すると負けるかもしれないし、時間掛かるし。で、議論しないで先ほどおっしゃった既成事実を積み重ねていくと、そのうち諦めるだろうと。いわゆる仕方がないという論理ですね。で、そういうふうに外堀を埋めていって仕方がないという議論を巻き起こして諦めていただいてようやく公共工事ができていくと。そのプロセスは土地の強制収用をしないでお金をばら撒いていくっていうことですね。

だからちょっと前出しましたけど、何でもそうですが事業費と同じくらい地元対策費がある訳ですね。1,000億の事業だと1,000億円地元対策費。河口堰は上と下だから2倍掛かっている訳ですね。だから公共事業って小さく生んで大きく育ててるんですけど、最初に計上されるのは工事費だけですから対策費を入れると2倍ないし3倍になっていくという。そういう意味ではすごいお金掛かるそういう仕組みになっているという状況です。だから皆さんおっしゃっていた日本の公共事業の進め方、諦めさせるということですね。一旦進むとですね、退くことができないというのも役所の体質ですね。

私は今、小池さんが東京都の知事になったもんですから環境省のときの上司だったんでついでに東京都の仕事も手伝ってるんですけども、豊洲、築地の問題をずっとやっていてですね、これも同じです。もうここまで造っちゃたんだからやるしかないでしょというそういう理屈があって、あと理屈を一生懸命作っていく。驚いたことに豊洲が開場したときに経営はどうなるんですかと聞いたら、計算してませんと。計算してくださいね。あつ毎年100億円の赤字になります。キャッシュフローで20億円の赤字です。どうするんですか。大丈夫ですよ東京都税金ありますしという。だけどそれは経営体としてはおかしいんじゃないですかということと、開場する前に経営がどうなるかの計算もしていないという。これも視野狭窄状態で造るんだというのが役所の仕事になっていて他は考えないということですね。

小泉さんが、小泉総理が面白いこと言ってたんですけど、満州が日本の生命線だと言って一生懸命戦争やって最後負けちゃって日本が占領されちゃったってことで終わる訳ですが、じゃ戦後満州がなくても世界第二位の経済大国になったじゃないかと。本当に生命線だったのかと。というような議論をして小泉流の乱暴な議論なんですけども。退く勇気っていうのはすごい大変で、退かないのにすでに投入したお金や兵士の命ということでもっともお金をつぎ込んでもっともって死人が出るという。そういう体質が日本にあるのかなと、私たちが今、戦っているというか議論、戦っているというのは変ですけども、議論しようねってずっと国交省に言ってるんですけども。議論したくないと、オープン場で議論したくない。というのがずっと続いているので、辻井さんがおっしゃったように皆集まって議論しようね。というのを我々も呼びかけているわけですけど、なかなか国土交通省が出てこないという状況がずっと続いていると、こんな状況ですね。理屈としては終

わっているんじゃないかと思うんですけどもそれを県民の人に知らせていくというのが私たちがやらなきゃいけない事柄ってことです。そういう日本独特の風土の中にいるもんですから世界の流れから段々取り残されていくと。

これはなかなか面白い絵ですね。パタゴニアさんがスポンサーになられたダムネーションもそうですけど、アメリカやヨーロッパで何が起きているかっていうこととほとんど無縁にですね、日本の行政がずっと続いているということなので、これは是非、直していきたいなど、いろんな情報を入れてオープンに議論する。落ち着くところに落ち着くのが民主主義なので、右へ行こうが左へ行こうが前へ行こうが後ろへ行こうが皆が知ったうえで決めればいいということなんだろうというふうに思います。

今回はですね、連続講座の5回目で最後ということなんですけども、来年度から、この諦めないぞと、続けるぞという方向をですね、検討委員会でまた議論していこうと思っています。一番大きなのは、この今までの長良川河口堰検討委員会の成果、国土交通省とのやり取り、ものすごく専門的なのでこれを県民の人にわかりやすく理解していただくという作業をやらなきゃいけないというふうに思っています。ということで提案の1は検討会議で議論しますが、パンフレットを作成する。以前、薄い冊子を作りましたが国土交通省とのやり取りをまたわかりやすい形でパンフレットに作るというのが第1ですね。

それから長良川河口堰の現場の見学会、県民の方々にも来ていただいて見学会をすることも考えたいと思います。

それから河口堰が長い時間が経ってまた土砂がきて凸凹ができていくということが明らかになっているんですけど、いわゆるマウンドが復活しているっていう。ここをですね、ちゃんと調査をする。新しいデータを作り出すというようなことを来年度やったらどうかということで検討委員会の中で議論をして引き続き諦めない、継続をするということで長良川河口堰の開門調査というものを続けていきたいと思っています。

最後にですね、藤前干潟がうまくいった成功例なんですけども、今もう一つ河村市長のところで相生山の真ん中に、天白区の相生山の真ん中に道路を通すっていうのを数年越しで今後道路をやめて都市公園にすると、ユニバーサルデザインの都市公園にするという計画を進めています。これも都市計画決定の変更までに持っていければ、あるいは住民の方々と話をしている訳ですが、一つ緑守っていく、8割がたできている道路をやめて公園にするということなので随分時間掛かってますけども、これも一つの成功例になるかなと思っています。いずれもやはり地元の方々の粘り強い運動があるんですね。相生山もそうですし藤前でもそうでした。やはり NGO なり住民の方々のベースがあってはじめて行政も動いていくということになると思います。

日本人の体質もう一つ、水戸黄門が大好きというのがあってですね、結局、お代官様、越後屋さんが悪いとですね、さらに上の権威に頼っていく。つまり、自分で頑張るぞじゃなくてお上に頼る、さらに上位のお上に頼る。という水戸黄門方式ですね。私は常々言ってるんですが、そうじゃなくて七人の侍だろうと。農民が用心棒を雇ってですね一緒に戦

うと、金も出すし汗も出すと。そういうことでようやく自分たちの生活が守れるということなので、水戸黄門方式ではなくてやっぱり七人の侍でいかなきゃいけないねと。

ただ、日本の NGO は清く貧しく美しいもんですからなかなかお金がうまく回っていかない。欧米は大企業並みのお金が動いてます。特に生き物関係はですね、アメリカのレインジャー、国立公園に人を派遣したり国連並みの給料出してですね、やっている。何千億という予算で回している NGO もあります。ほとんど大企業なんですね。そういう訳で NGO も清く貧しく美しい体質からですね、脱却していただく必要があるのではないかと思います。

来年度もまた、新しい活動をしてまいりますのでよろしくご参加をいただきたいと思います。今日はどうもありがとうございました。

(原田委員)

小島敏郎座長、どうもありがとうございました。来年度もということでしたので引き続きどうぞよろしく願いをいたします。第5回となります最終回「清流長良川流域の生き物・生活・産業」連続講座、長良川の魅力を語りつくす！これにて終了とさせていただきます。皆様お手元にアンケートありますでしょうか。どうぞご記入をお願いいたします。

そして、パタゴニアさんのお知らせと、平工さんのゆいのふねの一口オーナー募集とあります。皆さんの志のあるご協力ありましたらと思います。本日はどうもありがとうございました。司会は原田さとみでした。ありがとうございます。山本委員ありがとうございました。皆様お気をつけてお帰り下さい。またお会いいたしましょう。